

史跡和田岡古墳群
吉岡大塚古墳

第6次発掘調査報告書

2015

掛川市教育委員会

史跡和田岡古墳群
吉岡大塚古墳

第6次発掘調査報告書

2015

掛川市教育委員会



吉岡大塚古墳 遠景（北から）



吉岡大塚古墳 遠景（北西から）



吉岡大塚古墳 全景



吉岡大塚古墳 全景（北から）

例　　言

- 1 本書は、静岡県掛川市高田字大塚、吉岡字大塚腰 外に所在する吉岡大塚古墳の第6次発掘調査報告書である。
- 2 調査は、吉岡大塚古墳の史跡整備に必要な資料を得るために確認調査であり、国および静岡県の補助金を得て、掛川市教育委員会が実施した。
- 3 吉岡大塚古墳の第6次発掘調査は、平成25年7月19日～11月14日まで現地調査を行い、26年度に整理調査と報告書の作成を行った。
- 4 現地調査ならびに整理調査にあたっては、和田岡古墳群整備委員会専門委員である大塚初重（明治大学名誉教授）、向坂創二（一般社団法人 浜松史蹟調査顕彰会理事）、滝沢誠（筑波大学人文社会系准教授）、高瀬要一（公益財団法人 琴ノ浦温泉山莊園理事長）の指導を受けた。
- 5 本書の執筆・編集は、井村広巳（掛川市教育委員会社会教育課）が行い、附編については、滝沢誠が執筆した。
- 6 発掘調査ならびに報告書作成にあたり、以下の方々からご教示・ご協力をいただいた。記して感謝する。（敬称略）
大谷宏治 木村弘之 柴田稔 鈴木一有 鈴木敏則 平野吾郎 前田庄一
- 7 調査によって得られた資料および出土遺物は、掛川市教育委員会社会教育課が保管している。

凡　　例

- 1 本書で用いた座標値は、世界測地系に基づく。方位は座標北、標高は海拔高である。
- 2 遺物番号は、遺物の種別にかかわりなく、連番を付している。

目 次

巻頭図版

例言・凡例

第1章 はじめに

1 調査にいたる経緯と目的	1
2 調査経過と方法	2
3 遺跡をめぐる環境	3

第2章 調査成果

1 造構

1) 第13トレンチ.....	8
2) 第14トレンチ.....	8
3) 第15トレンチ.....	8
4) 第16トレンチ.....	13
5) 第17トレンチ.....	13
2 出土遺物	18

第3章 各和金塚古墳出土埴輪について

1 古墳の概要と調査履歴	22
2 出土埴輪	22

第4章 まとめ

1 第6次調査の成果	33
2 墓丘の復元	33
3 墓輪の復元	35

附編 吉岡大塚古墳小考	37
-------------------	----

挿図目次

第1図 古墳の位置と周辺の古墳分布図
第2図 吉岡大塚古墳周辺地形図 4
第3図 トレンチ配置図 5
第4図 昭和54年墳丘測量図及びトレンチ配置図 6
第5図 平成19年度墳丘測量図 7
第6図 遺構全体図 9
第7図 第13トレンチ実測図 11
第8図 第14、15トレンチ実測図 12
第9図 第16トレンチ実測図(1) 14
第10図 第16トレンチ実測図(2) 15
第11図 第17トレンチ実測図(1) 16
第12図 第17トレンチ実測図(2) 17
第13図 出土遺物実測図(1) 19
第14図 出土遺物実測図(2) 20
第15図 出土遺物実測図(3) 21
第16図 各和金塚古墳出土埴輪実測図(1) 26
第17図 各和金塚古墳出土埴輪実測図(2) 27
第18図 各和金塚古墳出土埴輪実測図(3) 28
第19図 吉岡大塚古墳墳丘復元図 31
第20図 行人塚古墳墳丘図 33
第21図 吉岡大塚古墳埴輪復元図 35
第22図 吉岡大塚古墳の築造企画 38

図版目次

卷頭図版	
1	吉岡大塚古墳遠景 (北から)
	吉岡大塚古墳遠景 (北西から)
2	吉岡大塚古墳全景
	吉岡大塚古墳全景 (北から)
図版	
PL.1	第13、15トレンチ調査前 (南から)
	第14トレンチ調査前 (南西から)
PL.2	第16、17トレンチ調査前 (北から)
	第13トレンチ完掘 (南西から)
PL.3	第13トレンチ完掘 (北西から)
	第14トレンチ北壁土層
PL.4	第14トレンチ完掘 (南から)
	第15トレンチ完掘 (西から)
PL.5	第16トレンチ上段葺石確認状況 (北から)
	第16トレンチ確認状況 (北から)
PL.6	第16トレンチ葺石完掘 (北から)
	第16トレンチ完掘 (北から)
PL.7	第17トレンチ上段葺石確認状況 (南東から)
	第17トレンチ (北から)
PL.8	第17トレンチ上段葺石完掘 (北から)
	第17トレンチ完掘 (北から)
PL.9	出土遺物(1)
PL.10	出土遺物(2)

表目次

第1表 吉岡大塚古墳出土遺物観察表 29
第2表 各和金塚古墳出土埴輪観察表 30
第3表 吉岡大塚古墳墳丘計測表 33



第1図 古墳の位置と周辺の古墳分布図

1. 吉岡大塚古墳
2. 春林院古墳
3. 行人塚古墳
4. 氷塚古墳
5. 各和金塚古墳
6. 高田上ノ段古墳群
7. 吉岡下ノ段古墳
8. 吉岡原古墳群
9. 藤六古墳群
10. 東登口古墳群
11. 女高古墳群
12. 高田古墳群
13. 八房ヶ谷古墳群
14. 高田遺跡
15. 女高1遺跡
16. 若王子神社古墳群
17. 堂前横穴群
18. 甚佐ヶ谷横穴群
19. 高代山古墳群
20. 旗差古墳群
21. 神明塚古墳
22. 奥ノ原古墳
23. 西岡津古墳
24. 向山古墳群
25. 前坪古墳群
26. 本村古墳群
27. 浅間神社3号墳
28. 原川古墳
29. 香ヶ谷横穴群
30. 権現山古墳
31. 宇佐八幡境内1号墳
32. 石ノ形古墳

第1章 はじめに

1 調査にいたる経緯と目的

和田岡古墳群は、静岡県掛川市の北西部 各和、高田、吉岡3地区の総称である和田岡と呼ばれる地区に点在する古墳群である。この古墳群は、二級河川原野谷川が形成した河岸段丘である和田岡原の東西約1.2km、南北約2.2kmの範囲に存在し、平成8年3月に国の指定史跡とされた4基の前方後円墳（各和金塚古墳、瓢塚古墳、吉岡大塚古墳、行人塚古墳）と1基の円墳（春林院古墳）、市の指定となっている東登口古墳群などにより構成されている。

1930年に刊行された「静岡縣史」第1巻の中で、吉岡大塚古墳、各和金塚古墳、瓢塚古墳について詳しく述べられている。吉岡大塚古墳について、「…形もよく整ひ、周囲には遼をめぐらした跡あり、未だ発掘されてゐない。中略 長さ凡50米、後円部高6米強、径凡36米、前方部の長さ14米、同幅17米、環溝は塚を繞りて長方形に跡を残してゐる。」と記載されている。瓢塚古墳については、明治30年代に発掘され、埋葬施設の状態や副葬品について詳細に報告されている。こういったことから古くから和田岡古墳群は、注目すべき古墳群であったことが窺える。また、和田岡地区は掛川市内でもお茶の生産が盛んな地域であり、古墳の周囲には広大な茶園が広がっている。そのような環境の中、和田岡古墳群は地元住民の理解もあって、重要な古墳として消滅することなく、良好な形で保存されてきたのである。

和田岡古墳群の本格的な調査は、昭和38年、春林院古墳の全面発掘に始まる。その後、掛川市教育委員会により、昭和53～55年度、57年度に瓢塚古墳、吉岡大塚古墳、各和金塚古墳の確認調査が行われている。行人塚古墳については、周囲で発掘調査が行われ、規模や周溝の状況が確認されている。そして、その結果をふまえ東遠江において古墳時代中期の一大古墳群としてまとまりがあり、当該期の首長墓系譜を追うことができる重要な古墳群として、国指定史跡となった。平成18年、古墳の保護と活用を図るために「和田岡古墳群考古学公園整備基本計画」が策定された。この基本計画のなかで、帆立貝型の形状が良好に残り、周辺に広大な茶園が広がり、和田岡古墳群のランドマークとなっている吉岡大塚古墳を最初の整備対象として位置づけている。そこで、平成19年から21年、23年と古墳整備に必要な基礎資料を得るために確認調査を行い、報告書を作成してきた。これまでの調査結果をまとめたところ、吉岡大塚古墳を復元整備するためには、まだ資料が不足していることが明らかとなった。そこで、今回補足調査を行うことになった。この補足調査の内容については、和田岡古墳群整備委員会の中で協議された。

補足調査の内容は、以下の通りである。

- ① 平成19、20年度に調査した後円部東側の第2トレンチでは、周堤帯は確認されていないが、その南側に設定された昭和54年調査のAトレンチでは、その存在が確認されている。そこで周堤帯の有無を確定するため2本のトレンチを設定する。
- ② 平成19年度に実施した墳丘測量図(第5図)を見ると周溝東側の一部分に周溝外側から墳丘に向けて3mの突出部分があることが認められる。この突出部分の延長線上の墳頂には、地中レーダー探査によって主体部があると推定された。そこで、この周溝内の突出部分の性格を把握するための調査を行う。
- ③ これまでの調査により、後円部の東、南、西の第1、2、4トレンチから墳丘中段には、ほぼ同じ幅(約1.3m)のテラスが巡っていることが明らかとなっている。しかし、北側の第3トレンチで

は、約4mの幅広のテラスになると前者とは異なる見解が報告されている。墳丘を復元するにあたり、この北側テラスを再検討するための調査を行う。

平成25年6月18日付けで掛川市教育委員会は、文化庁に「史跡名勝天然記念物現状変更許可申請」を提出し、7月19日付けで文化庁から現状変更の許可を受けた。

2 調査経過と方法

トレチ設定 周堤帯の有無を確認するため周溝の南東部分に、幅1.5m、長さ10mの第13トレチ、周溝の北西部に幅1.5m、長さ6.2mの第14トレチを設定した。周溝内の突出部の性格を把握するために幅1.5m、長さ4mの第15トレチを設定した。後円部北側のテラスの状況を確認するため、第16、17トレチを設定した。

グリッド設定 調査にあたり第2次調査時に設定した5m方眼のグリッドを使用して調査を行った。東西の列を西からA、B、C…のアルファベットで、南北の列を北から1、2、3…の数字で表し、それぞれの交点をその杭の名称とし、グリッド名は北西角の杭の名称と一致している。7月29日から作業を開始し、第14、17、18、16、13トレチの順に掘削を開始した。

遺構検出・掘削 各トレチの表土を鍬と鏟簾を使用し、15~20cm掘り下げた後、それぞれの状況に応じて、移植ゴテを使用して丁寧に掘り下げた。第16、17トレチは、崩落した葺石や埴輪が、多量に確認されたため、実測して取り除きながら葺石を検出した。

実測 第16、17トレチは、葺石、埴輪片が出土したため、1/10の縮尺で、他のトレチの平面図と土層断面図は1/20の縮尺で作成した。

写真撮影 現地記録写真の撮影は、6×7判(モノクロ)と35mm判(カラーネガ、リバーサル)2台、デジタルカメラを使用した。調査区遠景、全景の垂直写真等の撮影は、業者に委託し、ラジコンヘリコプターを用いて行った。

現地指導 10月3日 文化庁調査官 林正憲氏の現地指導を受けた。

10月8日 和田岡古墳群整備委員会の委員による現地指導を受けた。

現地見学会 10月27日 市民向けの現地説明会を開催した。参加者は42名であった。11月1日 和田岡小学校6年生が、現地を見学した。

11月9日 天竜浜名湖鉄道主催の和田岡古墳群を巡るウォーキングが実施され、多くの参加者が調査風景を見学した。



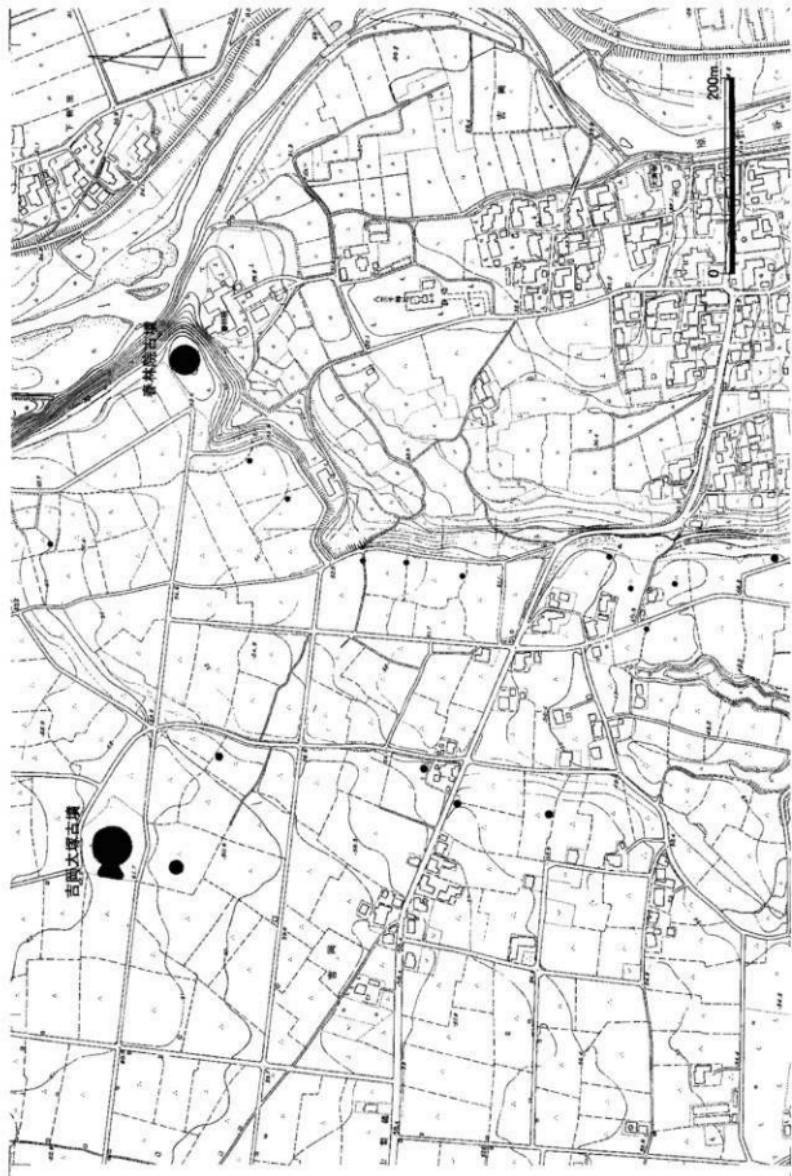
実測風景



整備委員による現地指導



現地説明会



第2図 吉岡大塚古墳周辺地形図

現地調査、整理調査参加者
太田敏子、笠谷みゆき、進士きよ子、鈴木良晴、多賀一美、寺沢巧、深田重男、福田一郎、
福田貞夫、藤田理恵、溝口玉緒、山崎シズ、山崎富士男、鈴木周哉(筑波大学)

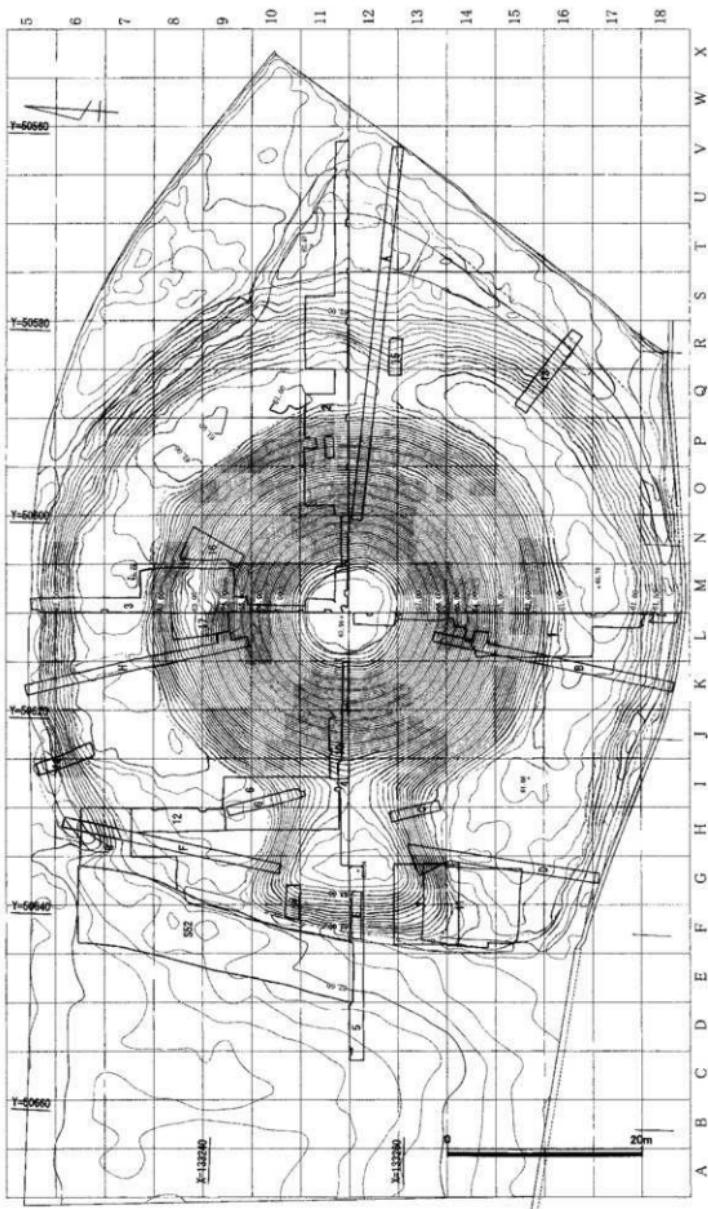
3 遺跡をめぐる環境

和田岡古墳群は、掛川市の最高点である八高山(標高832.1m)を源流とする原野谷川が形成した河岸段丘上に位置する。原野谷川は、上流では山を蛇行しながら北東から南西に流れ、小規模な河岸段丘を形成している。そして、中流域では南に流れを変え、西岸には和田岡原を形成している。原川付近で東海道を横切り、袋井市広岡付近で掛川市内を東西に流れる逆川と合流している。和田岡原は、標高60m前後の吉岡原と呼ばれる上位段丘面と標高40~50m前後の高田原と呼ばれる下位段丘面に区分される。吉岡大塚古墳は、上位段丘である吉岡原の縁辺部からやや奥に入った平坦部に、春林院古墳は、吉岡原の段丘縁辺部に、瓢塚古墳、行人塚古墳は高田原の縁辺部に、各和金塚古墳は吉岡大塚古墳から約2km離れた各和段丘の縁辺部に位置している。

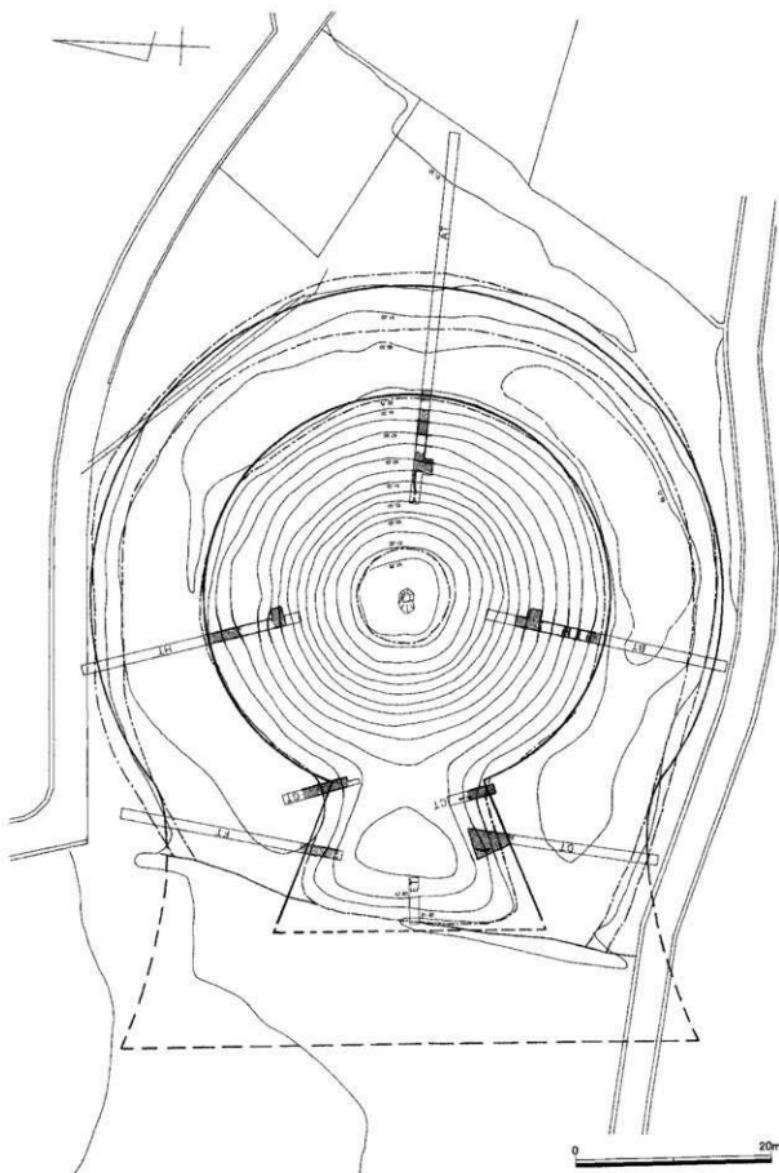
原野谷川流域には、旧石器時代から中世に至るまでの数多くの遺跡が分布している。ここでは、和田岡古墳群が位置する原野谷川中流の古墳時代、特に古墳について概観していくこととする。

東遠江において、古墳築造の初現は古墳時代前期末で、逆川左岸の丘陵上に立地する全長47mの前方後円墳の前坪3号墳(25)が最古とされている。そして、前坪3号墳より南東へ500mの位置に直径約40mの円墳で東側に造り出しをもつ浅間神社3号墳(27)が、中期前葉に築造されている。これらは、和田岡古墳群とは別の系譜の首長墓とされている。原野谷川流域の古墳の築造は中期に入ってから開始され、全長63mの前方後円墳の瓢塚古墳、直径30mの円墳の春林院古墳が築造された。瓢塚古墳は、埋葬施設が粘土桶で、獣形鏡2面、勾玉、管玉、鉄鎌、鉄劍が副葬されていた。また、壺形埴輪が出土している。春林院古墳は、埋葬施設が粘土桶で、その北側から鉄劍、鎧、針が出土している。葺石は2段に巡り、壺形埴輪が出土している。次に、この2つの古墳より約2km南に位置する各和金塚古墳が築造されている。そして、吉岡大塚古墳があるが、出土している埴輪などから中期中葉に築造されたといえる。行人塚古墳は、中期に築造されたことは確実であるが、その詳細については不明である。和田岡ではこのほかに、中期に位置付けられるものとしては、発掘調査によって確認された直径約10.5mの高田上ノ段古墳(6)や今坂遺跡、高田遺跡(14)、吉岡原遺跡の鉄製品を伴う多数の七塙がある。和田岡以外の地域をみていくと、岡津の独立段丘上では、5世紀後半に形状規模は不明であるが神獸鏡を出土した奥ノ原古墳(22)、5世紀末に変形獸文鏡を出土した西岡津古墳(23)や直径10m程度の向山古墳群(24)が存在している。この他には、独立段丘上に築造された高代山古墳群(19)は5世紀末から6世紀に、各和段丘の最南端に位置し、直径27mの円墳で造り出しをもつ石ノ形古墳(32)は5世紀末に、微高地上に位置し、直径10.8mの円墳で造り出しをもつ原川古墳(28)は5世紀末、全長29mの宇佐八幡境内1号墳(31)、全長約35mの前方後円墳の権現山古墳(30)は、6世紀初頭にそれぞれ築造されている。そして、6世紀後半以降では横穴墓群の造墓がみられる。

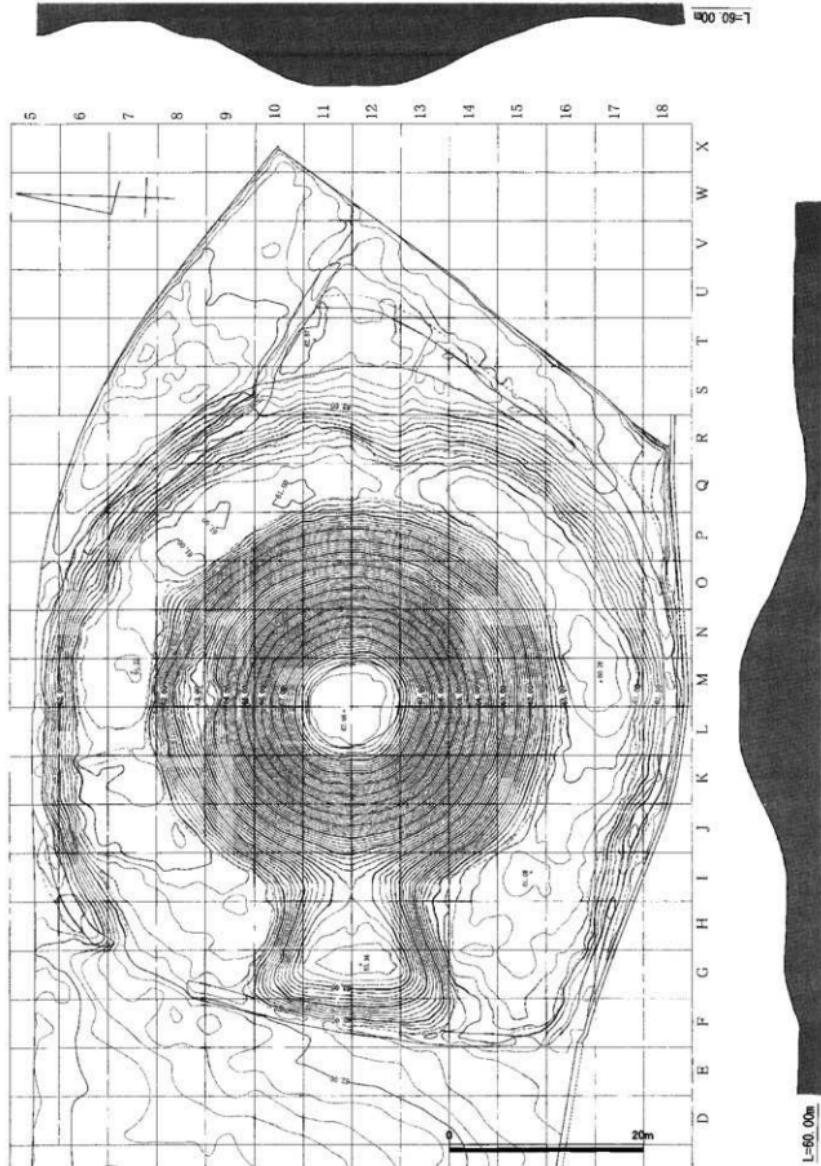
このように和田岡を中心とした原野谷川中流域では、墓から古墳時代中期の首長墓の系譜と階層の違いを推定することができる。また古墳時代中期から後期への葬送の変化を認めることができる。



第3図 トレンチ配置図



第4図 昭和54年度墳丘測量図及びトレーニチ配置図



第5図 平成19年度填丘測量図

第2章 調査成果

1 遺構

1) 第13トレーニング(第6、7図)

第13トレーニングは、周堤帯の有無を確定するため、周溝の南東部Q-15、16区、R-16区に設定した。周溝の南東部分は、周溝外側にわずかな高まりを認めることができる。トレーニング設定箇所での溝底と外側との比高は、2.5mであった。

表土層の厚さは、約10cmである。地山はトレーニング南東部では地表下約40cmにあり、後円部に向かい約4.5mは、ほぼ平坦面が続く。そして、その平坦面の端が周溝外側の上端となり、後円部に向かって緩やかに傾斜し、周溝外側下端に至る。周堤帯が想定される部分は、第7図A-A'の土層断面図で見られるように、風倒木によって攪乱を受けていた。トレーニング反対側の土層の堆積状況からも、盛土層を認めることができなかった。

周溝上端の確認面は、標高61.7m、下端の標高は、60.6mを測る。周溝埋土は、過去の調査で認められたように、10~20cm大の礫が多く混入し、地山にも礫が多く含まれ、溝底において礫が露頭する部分も多い。

以上のように第13トレーニングの調査結果では、周堤帯の存在は、認められなかった。

出土遺物は、第13図1、2の須恵器片と土師器小片があった。

2) 第14トレーニング(第6、8図)

第14トレーニングは、第13トレーニング同様、周堤帯の有無を確定するため、第13トレーニングとは墳頂部を中心に反対の位置となるI-5、6区、J-6区に設定した。調査前の地形は、周溝外側にわずかな高まりが認められた。トレーニング内の調査前の比高は、1.2mを測る。

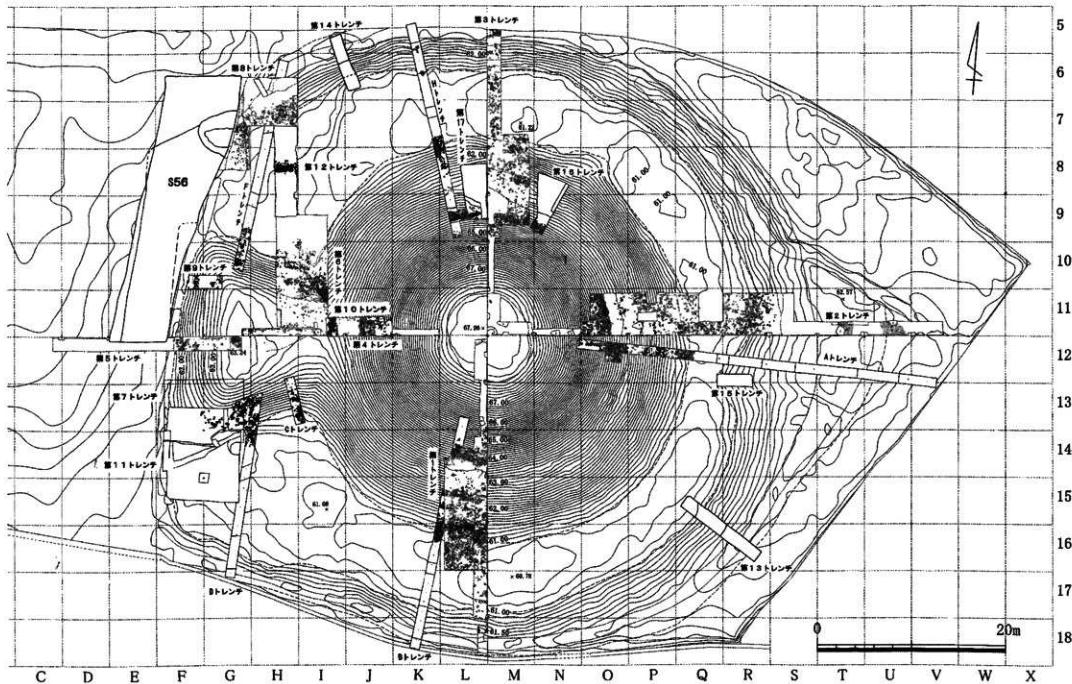
トレーニング北端から3m南、標高61.9m付近で周溝外側の上端を検出した。ここから南は緩やかに後円部に向かい傾斜している。周溝外側の下端は、標高61.4m付近である。周溝の外側に堆積していたのは、第8図の土層断面図に示したように、近現代の堆積物であった。1層中には、コンクリート、プラスチック製品が多量に混入し、2、3層中には2~3cm大の礫が混入し、4層には10cm大の礫と鉄片、農薬瓶などが混入していた。周囲の茶畑を造成する際に、地形が大きく改変されたと推定される。この攪乱層の下にある7層とした黒褐色土は、第8、11トレーニングでも確認された古墳築造以前の旧表土層である。検出高は、62.3mであった。また、第13トレーニング同様周溝内の埋土には、5~20cm大の礫が混入し、地山面は礫が露頭していた。

以上のように、この第14トレーニングにおいても周堤帯を確認することは、できなかった。

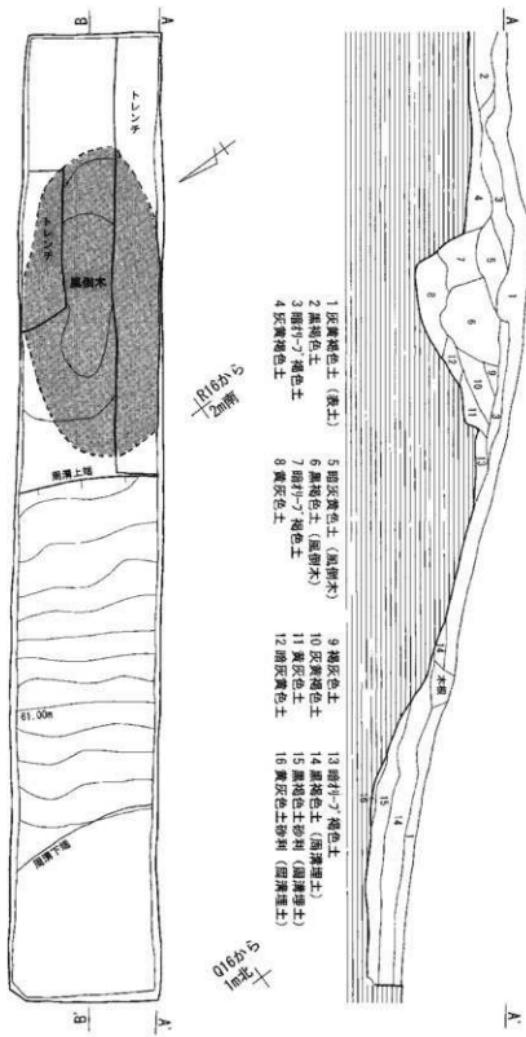
出土遺物は、7層の旧表土層から第15図32~36に示す縄文時代中期の土器が出土した。

3) 第15トレーニング(第6、8図)

第15トレーニングは、周溝内の突出部分の性格を把握するため、Q、R-12、13区、の周溝内に設定した。表土層の厚さは、10~20cmで、その下には周溝内の埋土である黒褐色土が約10cm堆積し、直下は地山となる。地山面は緩やかに後円部に向かい傾斜していることがわかる。第2トレーニングの成果をもとに標高61.0mの等高線に注目すると、現地表面での等高線と同じように、2.5m内側に張り出すことが確認できる。また、第13トレーニングでの標高61.0mは周溝外側の掘り込みの傾斜部分である。第15トレーニングにおいては、周囲のトレーニングと比較して、周溝底での掘削が明らかに浅いことが認めら

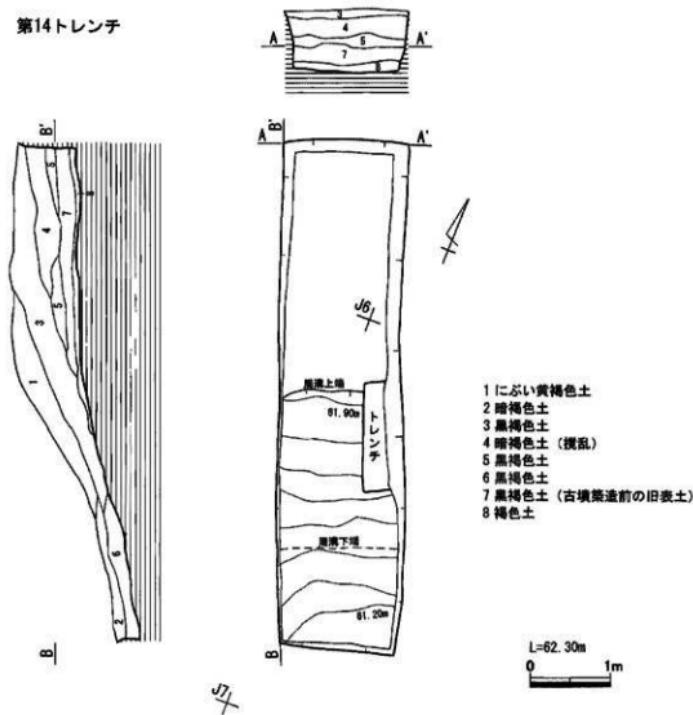


第6図 遺構全体図

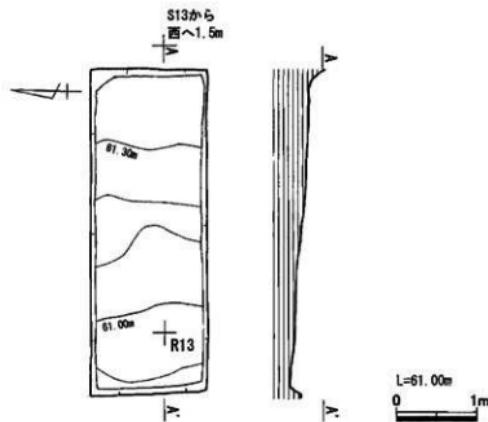


第7図 第13トレンチ実測図

第14トレンチ



第15トレンチ



第8図 第14、15トレンチ実測図

れる。古墳築造の際に、故意に掘り残していたと考えられるが、特に出土遺物があるわけではなく、どのような意図で掘り残されたのか不明である。

4) 第16トレント(第6、9、10図)

第16トレントは、M-9区、N-8、9区に設定した。このトレントは、後円部北側の墳丘中段にあるテラス幅を確認するためのものであり、第3トレントの東側に設定した。2011年の報告では、第3トレントのテラスは、幅が4mであると記述されているが、掲載された測量図では上段葺石の基底石から外へ約1m地点に変換点が認められる。

まず、墳丘上段葺石であるが、これまでの調査と同様、墳丘上段から崩落した多量の葺石と埴輪片を除去し、葺石を検出した。崩落した葺石は、5~20cm大の大きさで、約20cm堆積していた。葺石の基底石は、20~30cm大のやや大ぶりな石を横方向に配し、その上に15~20cm大の石を葺いている。基底石の標高は、約63.40mであり、第3トレント基底石より約15cm低い。

テラスは上段葺石の基底石から幅1.2~1.3mの平坦面が確認され、そこから下段墳丘へ傾斜する。このテラスには、5~20cm大の崩落した葺石と埴輪片が堆積していた。テラス検出面には、5cm大の石が散らばった状態で検出されたが、古墳の築造に伴うものか、判断できなかった。

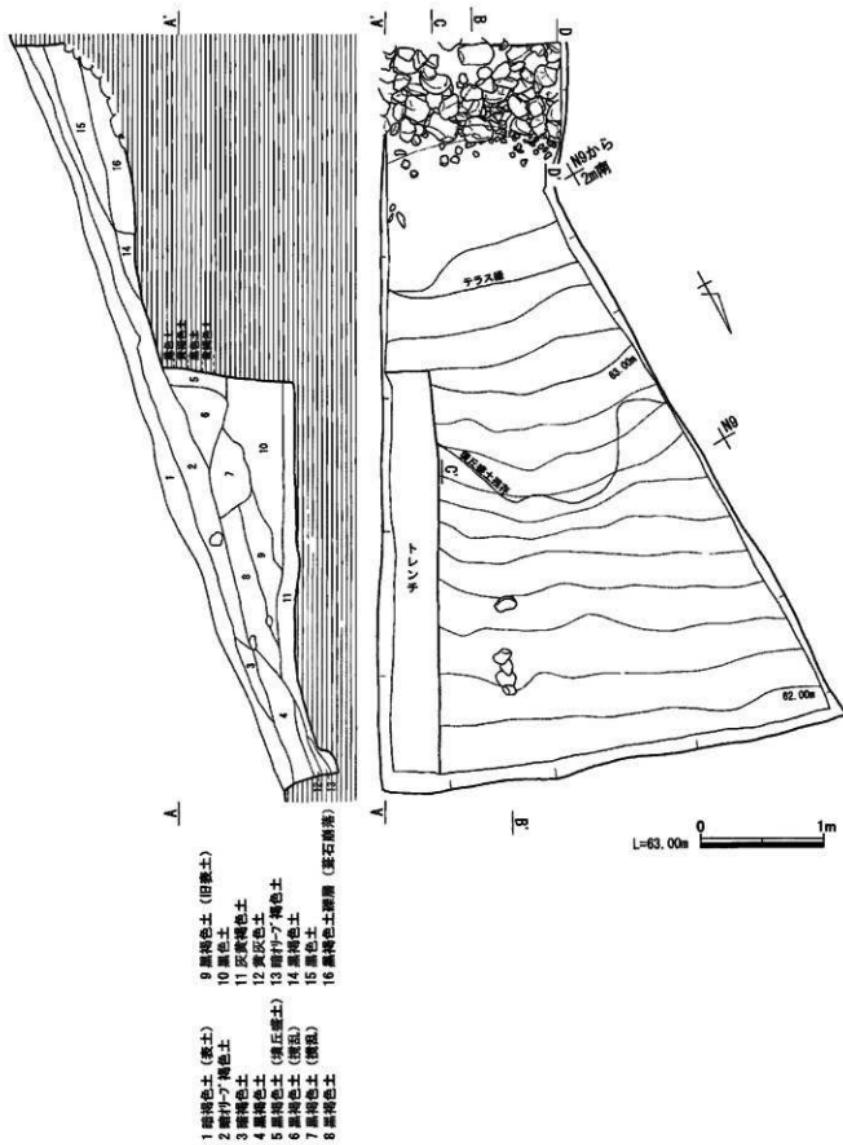
下段墳丘は、これまでの調査と同様、5~30cm大の石が散乱した状況で確認され、この石に混じり埴輪片も出土しており、どの石が葺石であるか判断できなかった。下段墳丘は、検出したテラスの外縁から墳裾約1.5~2.2m向かったあたりに盛土の末端が確認され、そこから墳裾にかけて旧表土の黒褐色土が露出していた。第16トレントの北端の一部では、地山の黄色土が認められた。また、調査区東側にサブトレントを設定し、墳丘盛土の堆積状況を確認した。第8、11、14トレントで確認された古墳築造前の旧表土層と考えられる黒褐色土は、標高62.5mで確認された。この黒褐色土の中から弥生時代後期の壺片(第13図10)が出土した。墳丘盛土はトレント東壁面では、黒褐色土の単層であったが、より墳丘側で土層の堆積状況を確認したところ、黒色土と黄褐色土が幅8~10cmで交互に積まれているのが、4段確認できた。

出土遺物は、第13図3~10であり、埴輪の多くは墳丘中段テラス周辺から出土している。固化したものは、3、5、6がテラスから、4、7、8がテラス下の下段墳丘から出土している。

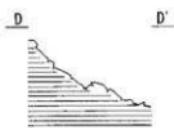
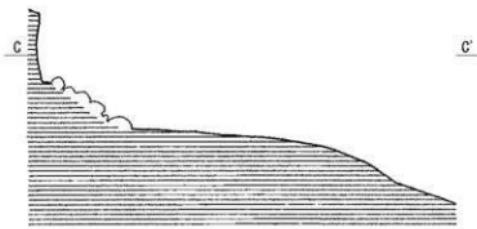
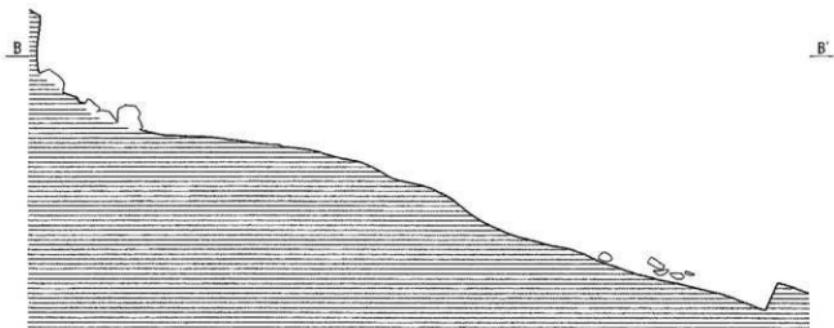
5) 第17トレント(第6、11、12図)

第17トレントは、L-8、9区に設定した。このトレントは、第16トレント同様、後円部北側の墳丘中段のテラス幅を確認するためのものであり、第3トレントの西側に設定した。第3トレントの西側は、テラスを挟んで上段墳丘裾部から下段墳丘上部にかけての4mにわたり搅乱を受けている。この搅乱は、第17トレントにも及んでいることが認められた。搅乱を受けず古墳築造時の状況を残すのは、上段墳丘とテラスの一部分であった。葺石が残存する部分では、表土下に墳丘上位から崩落した葺石と埴輪片が10~15cmの厚さで堆積していた。搅乱は、上段墳丘では表土から1.5m下まで及び、下段墳丘では地山まで達していた。搅乱層の中には、10~20cm大の葺石と埴輪片が混入していた。9層の黒色土は、固くしまった土で、古墳築造前の旧表土と推定される。墳頂側では盛土が確認でき、B-B'の土層断面図に示したように3層の上に葺石は葺かれていた。下段墳丘では、旧表土の黒色土に及ぶ数条の溝が深く掘り込まれ、この中に葺石に使用されていたと思われる5~20cm大の石と埴輪片少数が混入していた。墳丘の北側が大きく搅乱を受けた時期は、不明である。

残存した上段葺石は、基底石を含め2~3段が確認できた。基底石は、20cmほどの石を使用してい

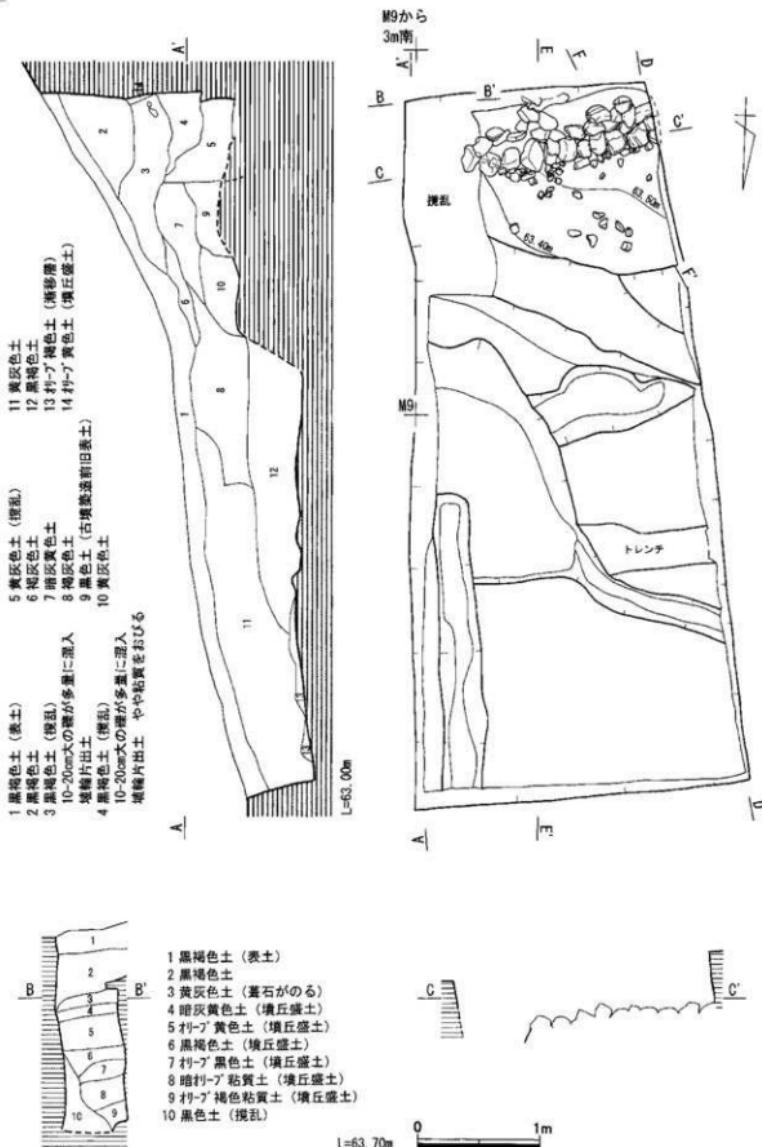


第9図 第16トレンチ実測図 (1)

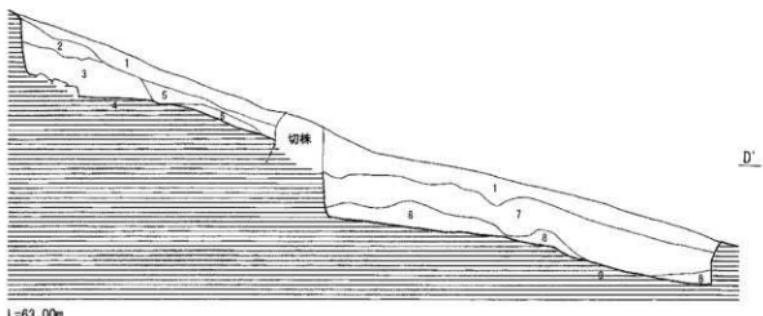


L=64.00m 0 1m

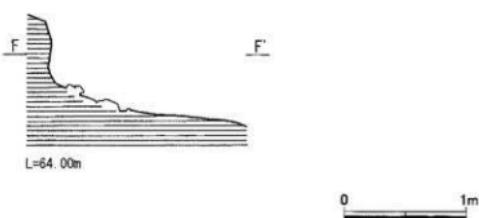
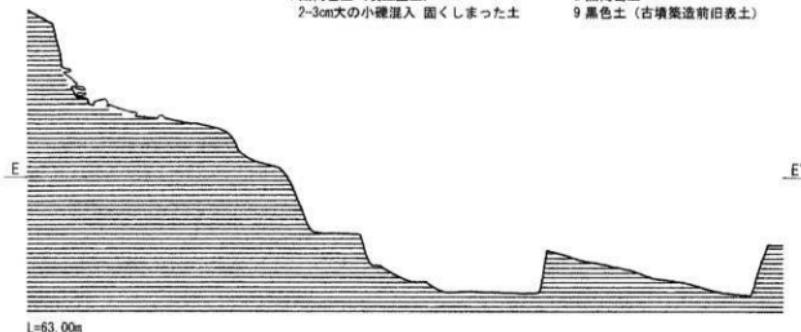
第10図 第16トレンチ実測図 (2)



第11図 第17トレンチ実測図 (1)



- | | |
|---------------------|-----------------|
| 1 黒褐色土（表土） | 5 膜付-ア'褐色土 |
| 2 黒褐色土 | 6 深灰黄色土 |
| 3 黒褐色土 | 7 黄灰色土 |
| 4 黒褐色土（填丘盛土） | 8 黑褐色土 |
| 2-3cm大の小礫混入 固くしまった土 | 9 黑色土（古墳築造前旧表土） |



第12図 第17トレンチ実測図（2）

る。第11図C-C'に見られるように、基底石の高さは擾乱の影響を受けているため、東に向かって傾斜していることがわかる。標高63.5~63.6mが基底石の高さと推定される。墳丘中段のテラスは、基底石から外側に最大で幅1mが確認できた。テラス面は、2~3cm大の小石が混入する固くしまった土で形成されていた。第16トレチ同様に古墳築造時のものか判断できない5cm大の石が認められたが、図化し現状保存することとした。

出土遺物は、第14、15図の11~31である。墳丘上段の崩落した葺石とともに出土した埴輪が、12、13、テラスから出土したのが11、16、22、23、29、墳丘上段の擾乱部分から出土したのが、17、19、30(3層)、20、24(4層)である。それ以外が14、15、18、21、25、26~28、31である。ここでは、円筒埴輪だけでなく朝顔形埴輪も出土している。

2 出土遺物

第13トレチ出土遺物(第13図1、2)

1は、中央の表土中から、2は、周溝部分の表土中から出土した須恵器の壺片である。ともに外面には、擬格子目状のタタキが施されている。

第14トレチ出土遺物(第15図32~36)

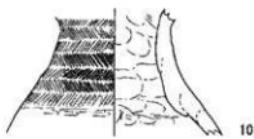
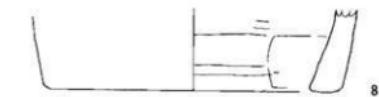
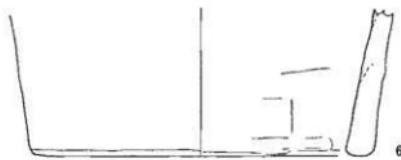
すべて縄文土器で、32、34~36は、旧表土中から出土し、33は、掘削土中で採集したものである。32は深鉢の把手、36は深鉢の底部近くの破片である。すべて縄文時代中期中葉に位置付けられる。

第16トレチ出土遺物(第13図3~10)

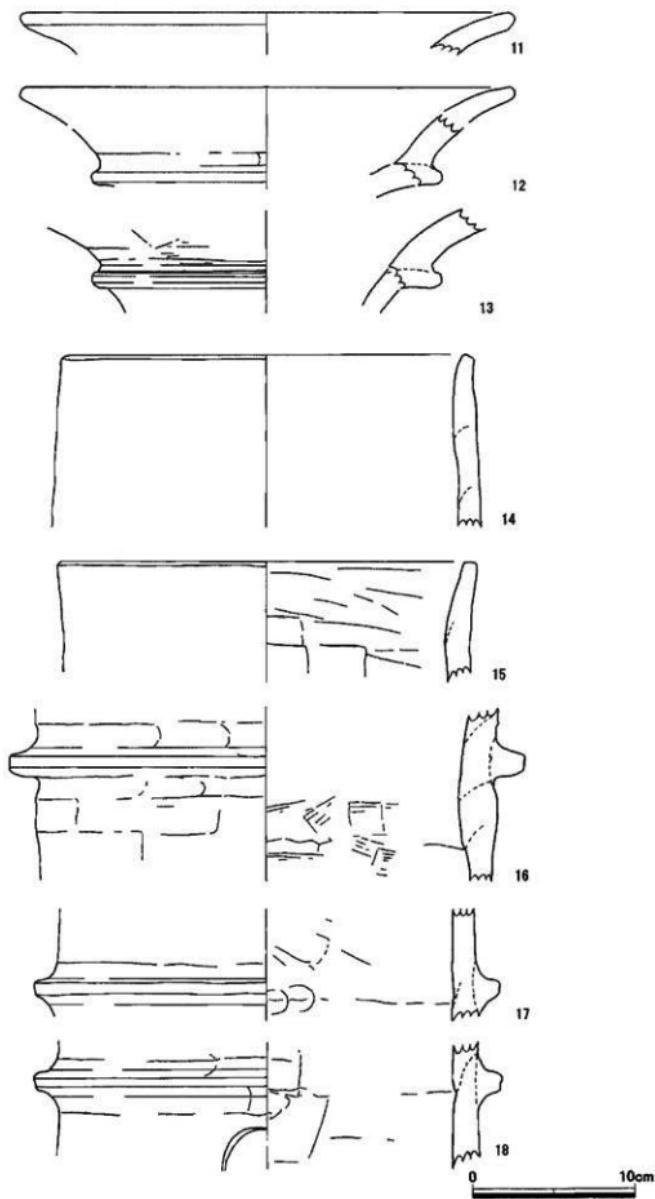
3、4は円筒埴輪に貼付されていた突帯の小破片である。突帯の外周には、ヨコナデが施されている。5~9は円筒埴輪の基底部である。底径は、8が17.6cm、5~7、9が20~21cmを測る。6は、やや直線的に立ちあがる基底部で、内面は、ヨコナデあるいはヨコ板ナデが施されている。7は、外面は板ナデ、内面はヨコナデが施されている。底部外周は、ヨコ板ナデで調整されている。8は、外面の調整は不明であったが、内面は幅広のヨコ板ナデが施されている。9は、掘削土中から採集したもので、やや内湾しながら立ちあがる基底部である。外面は、タテ板ナデが施された後に、底部付近のはみ出した粘土を板で削り取った痕跡が認められた。10は、弥生時代後期菊川様式の壺の肩部である。櫛刺突羽状文が施され、その下方には赤彩が認められた。

第17トレチ出土遺物(第14図11~18、第15図19~31)

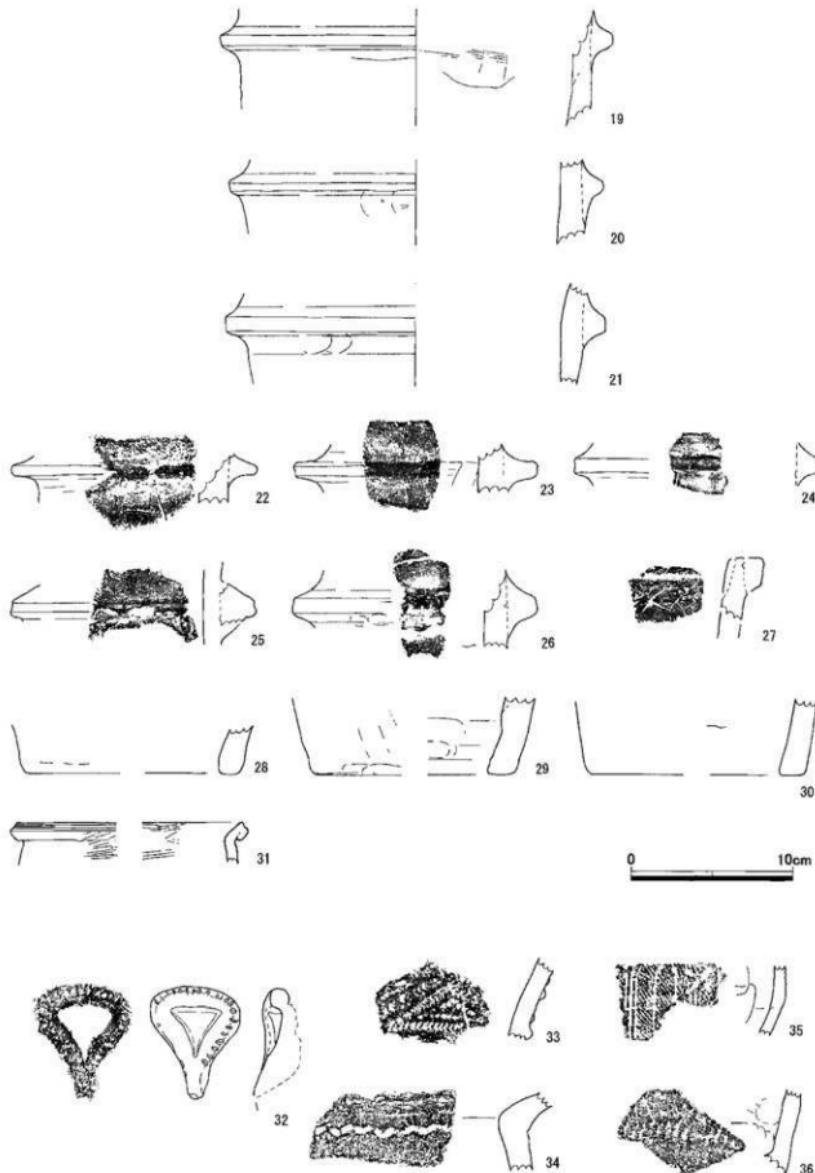
11~13は、朝顔形埴輪の口縁部である。11、12の口径は推定30cmである。13は、外面に板ナデとヨコナデが施されている。14、15は円筒埴輪の口縁部で、直立する単純なものである。口径は、約25cmを測る。ともに口唇部には、端面をもつ。15は、内面に板ナデが施されている。16~21は、円筒埴輪の体部片である。16~18は、最大径28~31cmを測る大型の円筒埴輪である。19~21は、最大径が23~24cmを測る小型の円筒埴輪である。16の突帯は、わずかに外面が凹み、断面M字形を意識した形状である。内外面ともにヨコナデあるいはヨコ板ナデが施されている。17の突帯は、体部と突帯の色調が異なることから別の粘土を使用して作られていることが分かる。内面は、斜位のナデが施されているが、板によるものか不明である。18は、17と同一個体と考えられる。円形の透かしが認められた。内面は、幅広の板ナデが施されている。19は、内面にヨコ板ナデがあり、20、21は突帯下にナデが施されている。22~27は、突帯部分の小破片である。22、23の突帯は細いものの、突出する。24~27は、突帯下に沈線が施されている。27は口縁部の上端部の突帯であるが、沈線直下の突帯剥離面に工具によるX状の刺突が施されている。28~30は、底部破片である。小片であるため、底径は不明である。底端部は面をもつ。摩滅がひどく調整は不明瞭なものが多い。29はわずかにナデ調整が認められた。31は、弥生時代後期菊川様式の鉢の口縁部である。



第13図 出土遺物実測図 (1)



第14図 出土遺物実測図 (2)



第15図 出土遺物実測図 (3)

第3章 各和金塚古墳出土埴輪について

2013年に刊行した吉岡大塚古墳第5次発掘調査報告書の中で、行人塚古墳の出土遺物の検討を行った。今回は、各和金塚古墳出土の埴輪について検討を行う。

1 古墳の概要と調査履歴

各和金塚古墳は、和田岡古墳群の中で最大の全長66mの前方後円墳である。後円部の直径は51.2m、高さは6.5m、前方部の幅は20.5m、高さは4mで、後円部は2段築成である。主体部は、昭和48年に大規模な盗掘を受けている。昭和52年度の発掘調査は、前方部に設置されている高压送電線鉄塔改修に伴うもので、古墳周辺の埴丘測量と前方部墳頂部に2本のトレーナーを設定して行われている。この調査により、前方部に埴輪棺と埴輪列が確認された。そして昭和55年度には、埴丘測量の補足と11箇所に及ぶトレーナー調査を、また盗掘を受けた主体部の現状確認調査を行った。これにより主体部は竪穴式石室で、床面には円礫が敷かれ、ベンガラが塗布されていたことが確認された。主体部からは大刀、鉢、刀子、鐵鎌、短甲など豊富な鉄製品の他、石製模造品が出土した。埴丘には葺石が葺かれ、前方部と後円部の墳頂平坦面、後円部の埴丘中段テラスには埴輪列が確認された。

2 出土埴輪

今回掲載した埴輪は、28点である。これまで様々な報告の中で、埴輪棺をはじめ、数点の埴輪が図化され紹介してきた。調査から30年以上が経過し、出土地点や調査年度が不明になっているものもみられるが、テンパコ15箱の中から比較的大きな破片は図化し、今回報告することとした。埴輪は、器表面の風化が激しく、調整が不明瞭なものも多い。

第16図37～39は、埴輪棺である。37は、38の棺身北側の小口蓋として使用されていた円筒埴輪の上半部であり、3方向に円形の透かしをもつ。口径は29cm、突帯間隔は中心で2段目11cm、3段目10.5cmを測る。突帯は、断面形が扁平な台形である。外面の調整は、ヨコ板ナデが施されている。突帯は、指押さえの後にヨコ板ナデが施されている。内面は口縁部から円形透かしがある位置まで幅広のヨコ板ナデが、その下方には幅が狭いヨコ板ナデが施されている。内外面に、赤彩が施されている。

38は、埴輪棺の本体に使用されていた朝顔形埴輪である。3方向に三角形の透かしをもつ。口径は30cmを測る。口縁部の開きは小さく、頸部に突帯をもたない。また突帯は、断面形が扁平な台形である。外面の調整は、口縁部はヨコ板ナデの後、ヨコナデが施されている。体部の調整は、タテ板ナデの後、ヨコナデ調整されている。内面は、ヨコ板ナデが施されているが、口縁部はその後、ヨコナデ調整されている。外面は全体に、内面は口縁部に赤彩が施されている。

39は、棺の本体南側の蓋と上面を覆うように使用されていた円筒埴輪である。割られて使用されていたが、各和金塚古墳では唯一全体形が分かる円筒埴輪である。口径は26.8cm、2条突帯3段構成で3方向に三角形の透かしをもつ。基底部(1段目)の高さは15cm、2条の突帯間(2段目)は10cm、口縁部(3段目)は8.5cmを測る。突帯の断面形は、扁平な台形である。調整は、基部がタテ板ナデ、2段、3段目がタテ板ナデの後に、ヨコ板ナデ、口縁部と突帯がヨコナデである。内面は全面にヨコ板ナデが施されている。下位の突帯より上は、内外面ともに赤彩が施されている。

第16図40～43は、埴丘主軸に添った後円部の北側埴丘頂部から中段テラスにかけて設定されたAト

レンチから出土した円筒埴輪もしくは朝顔形埴輪の基底部であり、40～42は墳頂部に樹立して出土した。底径は、15～17cmを測る。外面の調整は、タテ板ナデが施されているようである。40は、底部付近に押さえの痕が残る。内面の調整は、41が押さえとヨコナデ、42がヨコナデである。43は、中段テラスに樹立していた底部で、底径22.7cmを測る。内面は、押さえとナデで調整されている。肥厚した底部には、黒斑が認められる。

第17図44は、後円部北東の中段テラスから周溝にかけて設定されたBトレーナーにおいて、そのテラス部分から出土した円筒埴輪もしくは朝顔形埴輪の基底部である。底径は15cmで、底部付近は肥厚している。他にも底部片が数点出土している。

第17図45～48は、後円部東側において墳丘主軸とは直交する方向に、墳頂から墳裾にかけて設定されたCトレーナーから出土した。45～47は、墳頂部に樹立していた基底部で、底径は17.8～19cmを測る。45は、内外面ともに押さえの痕跡が残り、内面底部付近は、ナデが施されている。46は、外面にタテ板ナデが施されているよう、内面は指押さえ痕が明瞭に残る。黒斑が認められる。47は、外面上位はタテ板ナデ、その下方は押さえとナデが施されている。内面はヨコ板ナデが施されているようである。調整は粗く、作りは粗雑である。

48は、Cトレーナーの表土下から出土した形象埴輪である。49は、出土地不明であるが、その形状や胎土から同一個体であると考えられる。ともに厚さ約2cmで、表裏と側面は丁寧にナデ調整され、赤彩が施されている。48は、最も長い側面が割れ面ではあるが、擬口縁をなす。この擬口縁は、縱方向の細い棒状のものが差し込まれていたらしく、断面半円形の溝状の窪みが観察される。これは形状から蓋の立ち飾り(飾り板)の一部分であると考えられるが、棒状の差し込みが何なのか問題となる。

後円部の墳頂部から前方部にかけて設定されたDトレーナーからは、墳頂から2点の基底部が出土しているが、掲載していない。1点は底径不明であるが、1点は底径15.5cmを測り、内面は押さえとナデで調整されている。

第17図50は、古墳の主軸に直交する方向で、後円部西側の墳頂部から裾に向けて設定されたEトレーナーの墳頂部から出土した基底部である。底径は17.2cmを測る。外面はヨコナデ、内面は指押さえとナデが施されている。

第17図51、52は、前方部東側くびれ部に設定したGトレーナーから出土した。墳頂部と墳丘中段テラス部分に埴輪は樹立していた。51は墳頂部から出土した3点の埴輪の一つである。底径は、15.2～19cmを測る。内外面はともに押さえとナデで調整されている。残る2点は調整が不明瞭であったため、掲載しなかった。51と他の1点の埴輪に、黒斑が認められた。52は、中段テラスから出土した2点の埴輪の内1点を掲載した。底径は、18～19.2cmで、内面はヨコナデが施されている。

第17図53～55は、前方部の東側中央付近に設定されたHトレーナーの墳頂部から出土した。埴輪は樹立していた。53、54の底径は、17.4cm、15.4cmを測る。53は内面にヨコナデ、54は内面に押さえとナデで調整されている。55は、内湾しながら立ち上がる形状をもつことから壺形埴輪の底部と推定される。底径は12.6cmを測る。外面はタテ板ナデ調整のようである。内面は、押さえとナデで調整されている。

56は、盜掘穴から採集された朝顔形埴輪の頸部である。頸部径は12.4cmを測る。丁寧な作りで、タテ板ナデのうちにヨコナデを施している。頸部はヨコナデ調整されている。内面は押さえのち板ナデを施している。

第18図57～64は、出土地点が不明となってしまった埴輪である。57、61は円筒埴輪の上半部である。57は口径24cmを測る。透かしは方形であるが、個数は不明である。口唇部は面をもち、外面は

幅広のヨコ板ナデが施されている。突帯は断面形が扁平な台形で、押さえのちヨコナデ調整されている。内面もヨコ板ナデが施されている。内外面とも赤彩が施されている。61は口径28.8cmを測る。口唇部は丸く仕上げられ、内外面ともヨコ板ナデのちに口縁部付近のみヨコナデ調整されている。赤彩が施されている。

58、62、63は朝顔形埴輪で、58は肩部、62、63は口縁部である。58は、最大径26.8cmを測る。肩部の下に円形の透かしをもつが、個数は不明である。突帯は断面形が扁平な台形である。外面調整は、ヨコナデのようである。内面調整は、肩部にヨコ板ナデ、下方は押さえやヨコナデが施されている。62は、口径37.4cmを測る。口縁部の開きは小さい。一次口縁部は、タテ板ナデのちにヨコナデ、二次口縁部は幅広のヨコ板ナデのちにヨコナデが施されている。内面はヨコ板ナデが施された後に、ヨコナデが施されているようである。一次口縁部と二次口縁部の接合部には押さえ痕が認められる。63は一次口縁部の破片である。内面はヨコナデのち赤彩が施されている。

59は円筒埴輪の体部で、最大径は28cmを測る。透かしは方形であるが、個数は不明である。突帯は、断面形が鉗状に近い。外面の調整は不明瞭であるが、ヨコナデが施されているようである。内面はヨコ板ナデが施され、上部はヨコナデが施されている。内外面に赤彩が施されている。また外面には、焼成後の直径約1cmの穿孔が5カ所確認できる。孔は、1カ所貫通している。

64は、直径16cmの基底部である。外面はタテ方向のナデ調整が、内面はヨコ板ナデ調整と押さえがみられる。

60は、内湾しながら立ち上がる形状から壺形埴輪の底部と考えられる。底径は、18cmを測る。外面はタテ方向のナデ、内面は押さえとナデで調整されている。

以上限られた点数であるが、各和金塚古墳出土の埴輪を概観してきた。埴輪棺以外に埴輪の全体像がわかる出土品がなく、また口縁部の出土が少なかったため、埴輪の復元図を作成することを控えた。

埴輪の大きさについては、底径は42、51、54に見られる15cm代のものから、46の19cmまでのものがほとんどである。43だけが22.7cmと大きい。円筒埴輪は底径をもとに、大小2群に分類する明確な根拠がない。

埴輪棺を除き、墳頂部や墳丘中段テラスに樹立された埴輪には、赤彩が施されていなかった。これらの埴輪は、ほとんどが基底部しか残っていなかったことにもよる。出土地点が明確でない埴輪の中には赤彩が施されているものが含まれている。埴輪全てに赤彩があったのか、赤彩されるものと赤彩されないものがあったのか、今後、再検討の必要がある。

また、これまで形象埴輪はないと考えられていたが、2点の蓋と思われる破片が確認された。今後の調査に期待される。

そして吉岡大塚古墳と比較してみると、同じように墳丘にトレーナーを設定し調査を行っているが、各和金塚古墳の方が埴輪の出土点数ははるかに多い。各和金塚古墳の後円部、前方部、中段テラスに設定したトレーナーからは、原位置を保ち樹立していた埴輪が確認された。埴輪は、墳頂部では約10cm前後、墳丘中段テラスでは20~30cm前後の間隔を置いて、配置されていた。吉岡大塚古墳で原位置を保ち樹立していた埴輪は確認されず、埴輪の出土量から考えて、各和金塚古墳では吉岡大塚古墳よりも多くの埴輪が樹立していたといえる。

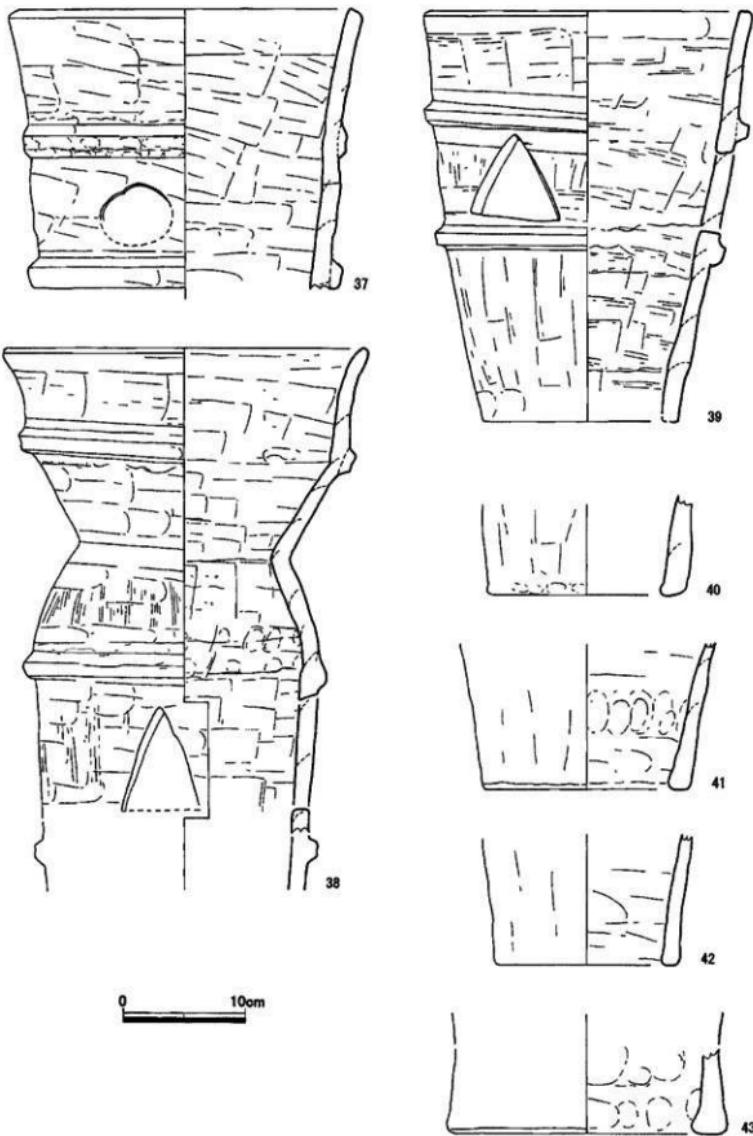
吉岡大塚古墳と同様、調整はハケを用いない板ナデまたはヨコナデが施され、また黒斑をもつものが認められた。異なる点は、各和金塚古墳では透かしに三角形と方形のものが認められること、また突帯下に沈線が認められなかったことである。形状においては、各和金塚古墳のものは、体部が樽状

に膨らみを持つものが確認できなかったことである。

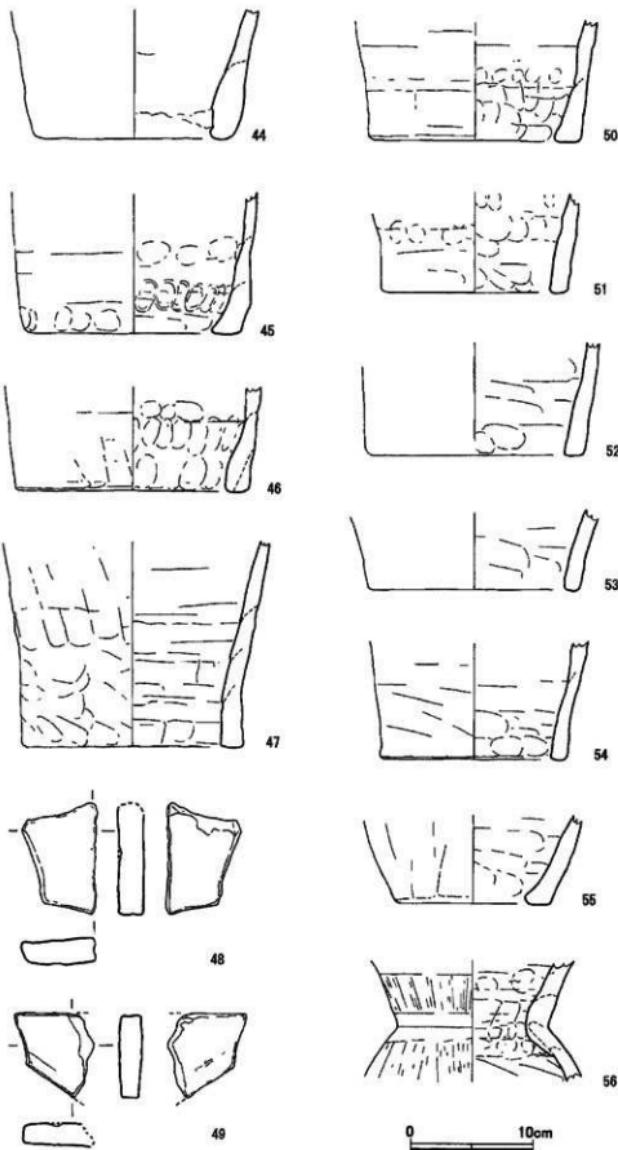
各和金塚古墳は、主体部が竪穴式石室で、武器・武具・工具を含む豊富な鉄製品が副葬された古墳である。しかし從来から述べられているように、和田岡古墳群を形成した首長層は、埴輪については畿内的な埴輪作りのルールから逸脱した地域独自の埴輪を継続して作り、使用していたのである。

<参考文献>

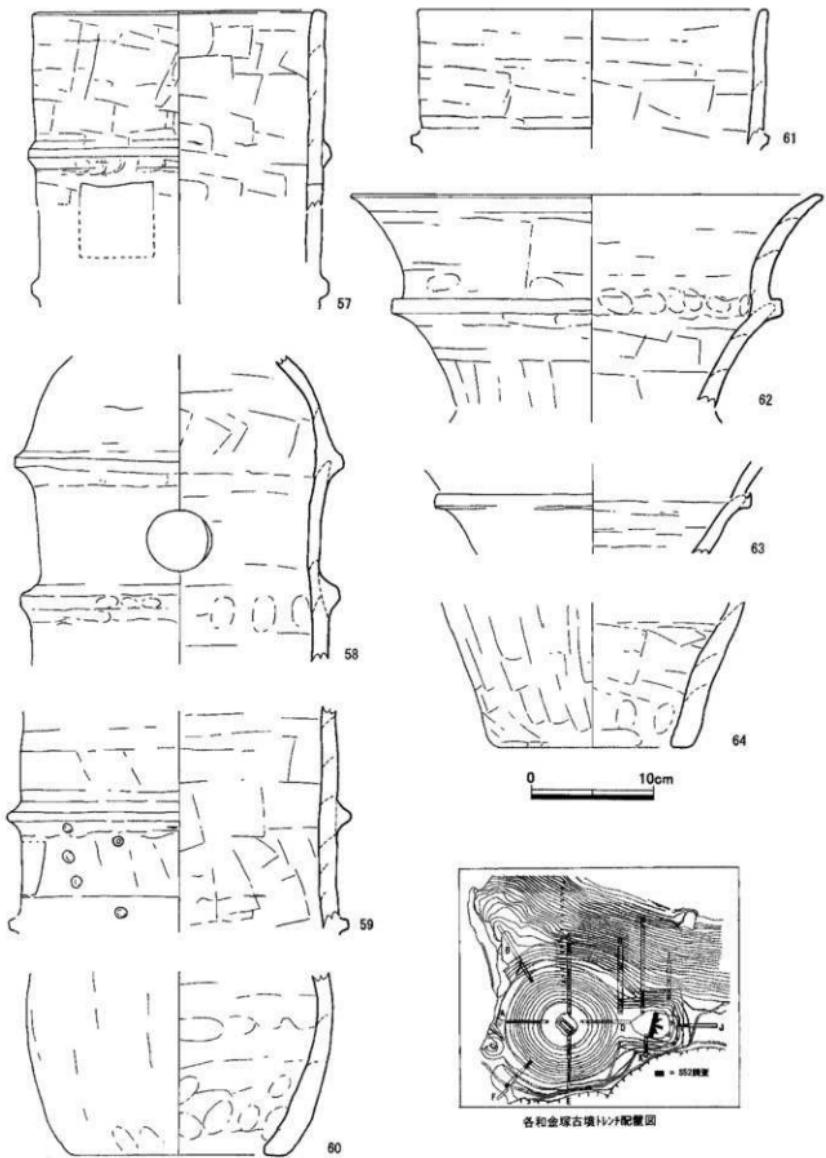
- 掛川市教育委員会 1974 「附載 各和金塚古墳について」「水垂二ツ池古墳群」
掛川市教育委員会 1978 「各和金塚古墳 高圧送電線鉄塔改修に伴う発掘調査報告書」
掛川市教育委員会 1981 「各和金塚古墳 測量調査報告書」
掛川市 2000 「各和金塚古墳」「掛川市史 資料編 古代・中世」



第16図 各和金塚古墳出土埴輪実測図（1）



第17図 各和金塚古墳出土埴輪実測図 (2)



第18図 各和金塚古墳出土埴輪実測図 (3)

第1表 吉岡大塚古墳出土遺物観察表

No.	種別	器種	部位	出土位置	法量	残存率	色調	備考
1	埴輪	甕	体部	第 13 トレンチ中央表土	-	3.5cm × 1 cm	灰色	
2	埴輪	甕	体部	第 13 トレンチ周溝表土	-	4cm × 2cm	灰色	
3	埴輪		突帯	第 16 トレンチ中段テラス	-	3cm × 3.5cm	橙色	
4	埴輪		突帯	第 16 トレンチ下段埴丘	-	3cm × 3cm	橙色	
5	埴輪		基底部	第 16 トレンチ中段テラス	底 20.6	底部 1/10	にぶい橙色	
6	埴輪		基底部	第 16 トレンチ中段テラス	底 20.6	底部 1/5	浅黃褐色	ヨコナナガ或いはヨコ板ナダ
7	埴輪		基底部	第 16 トレンチ下段埴丘	底 20.9	底部 1/7	明赤褐色	外面板ナダ、内面ヨコナダ
8	埴輪		基底部	第 16 トレンチ下段埴丘	底 18.1	底部 1/8	橙色	内面幅広ヨコ板ナダ
9	埴輪		基底部	第 16 トレンチ表探	底 20.8	5cm × 6cm	橙色	外向タテ板ナダ
10	弦生土器	壺	肩部	第 16 トレンチ旧表土	-	肩部 4/5	橙色	撚制突羽状文
11	埴輪	朝顔形埴輪	口縁部	第 17 トレンチ中段テラス	(30.0) 5.5cm × 8cm	-	橙色	
12	埴輪	朝顔形埴輪	口縁部	第 17 トレンチ埴丘上段崩落	-	4.5cm × 6cm	にぶい橙色	
13	埴輪	朝顔形埴輪	口縁部	第 17 トレンチ埴丘上段崩落	-	7.5cm × 5cm	にぶい褐色	外面板ナダ、ヨコナダ
14	埴輪	円筒埴輪	口縁部	第 17 トレンチ中段テラス擾乱	口 25.0	口縁 1/10	浅黃褐色	
15	埴輪	円筒埴輪	口縁部	第 17 トレンチ埴丘下段擾乱	口 25.4	口縁 1/10	にぶい橙色	内面板ナダ
16	埴輪		体部	第 17 トレンチ中段テラス	-	11cm × 13cm	にぶい橙色	ヨコナダ或いはヨコ板ナダ
17	埴輪		体部	第 17 トレンチ埴丘上段擾乱	-	9cm × 9cm	褐色(表面剥離有り)	突帯削粘土
18	埴輪		体部	第 17 トレンチ中段テラス擾乱	-	6cm × 8cm	褐色(表面剥離有り)	突帯削粘土、円形透かし
19	埴輪		体部	第 17 トレンチ埴丘上段擾乱	-	8cm × 9cm	橙色	内面ヨコ板ナダ
20	埴輪		体部	第 17 トレンチ埴丘上段擾乱	-	5.5cm × 8.5cm	橙色	
21	埴輪		体部	第 17 トレンチ中段テラス擾乱	-	6.5cm × 8.5cm	にぶい橙色	
22	埴輪		突帯	第 17 トレンチ中段テラス	-	4cm × 6.5cm	橙色	
23	埴輪		突帯	第 17 トレンチ中段テラス	-	3.5cm × 5.5cm	橙色	
24	埴輪		突帯	第 17 トレンチ埴丘上段擾乱	-	2.5cm × 3.5cm	にぶい橙色	突帯下に沈縛
25	埴輪		突帯	第 17 トレンチ埴丘下段擾乱	-	3cm × 6cm	橙色	突帯下に沈縛
26	埴輪		突帯	第 17 トレンチ埴丘下段表土	-	5cm × 5cm	橙色	突帯下に沈縛
27	埴輪		口縁部	第 17 トレンチ埴丘下段擾乱	-	4.5cm × 4.5cm	橙色	突帯下に沈縛、×刺突
28	埴輪		基底部	第 17 トレンチ埴丘下段擾乱	-	4cm × 5cm	にぶい橙色	
29	埴輪		基底部	第 17 トレンチ中段テラス	-	5.5cm × 6cm	褐色	
30	埴輪		基底部	第 17 トレンチ埴丘上段擾乱	-	5cm × 7cm	にぶい橙色	
31	弦生土器	鉢	口縁部	第 17 トレンチ埴丘下段擾乱	-	2.5cm × 4cm	にぶい橙色	
32	繩文土器	深鉢	把手	第 14 トレンチ旧表土	-	7cm × 5.5cm	にぶい赤褐色	
33	繩文土器	深鉢		第 14 トレンチ表探	-	5.5cm × 7cm	赤褐色	
34	繩文土器	深鉢	頸部	第 14 トレンチ旧表土	-	5cm × 8.5cm	極暗褐色	
35	繩文土器	深鉢		第 14 トレンチ旧表土	-	4.5cm × 7cm	褐色	
36	繩文土器	深鉢		第 14 トレンチ旧表土	-	5.5cm × 8cm	明赤褐色	

第2表 各和金塚古墳出土埴輪観察表

No.	種別	器種	部位	出土位置	法量	残存率	色調	備考
37	埴輪棺	円筒埴輪	口縁部	前方部墳頂	□ 29.0	口縁部 1/2	橙色	3方向円形透かし、赤彩
38	埴輪棺	切妻形埴輪	体部	前方部墳頂	□ 30.0	2/3	橙色	3方向三角形透かし、赤彩
39	埴輪棺	円筒埴輪		前方部墳頂	□ 30.0 △ 30.0 △ 30.0	4/5	橙色	3方向三角形透かし、赤彩
40	埴輪		基底部	Aトレチ墳頂部	底 16.3	底部 2/3	橙色	外側タテ板ナデ
41	埴輪		基底部	Aトレチ墳頂部	底 17.0	底部ほぼ完形	橙色	外側タテ板ナデ、内面押さえ、ヨコナデ、黒斑
42	埴輪		基底部	Aトレチ墳頂部	底 15.2	底部 4/5	橙色	外側タテ板ナデ、内面ヨコナデ
43	埴輪		基底部	Aトレチ中段テラス	底 22.7	底部ほぼ完形	橙色	内面押さえ、ナデ、底部に黒斑
44	埴輪		基底部	Bトレチ中段テラス	底 15.8	11cm × 9cm	橙色	
45	埴輪		基底部	Cトレチ墳頂部	底 17.8	底部ほぼ完形	橙色	内外面押さえ
46	埴輪		基底部	Cトレチ墳頂部	底 19.0	底部ほぼ完形	橙色	外側タテ板ナデ、内面押さえ、黒斑
47	埴輪		基底部	Cトレチ墳頂部	底 18.0	底部ほぼ完形	橙色	外側タテ板ナデ、押さえ、ナデ、内面ヨコナデ
48	埴輪	蓋	立ち筋り	Cトレチ表土下	—	8.5cm × 5.5cm	明赤褐色	赤彩
49	埴輪	蓋	立ち筋り	不明	—	7cm × 6cm	明赤褐色	赤彩
50	埴輪		基底部	Eトレチ墳頂部	底 17.2	底 3/4	橙色	外側ヨコナデ、内面指押さえ、ナデ
51	埴輪		基底部	Gトレチ墳頂部	底 15.2	4/4 完形	橙色	内外面押さえ、ナデ、黒斑
52	埴輪		基底部	Gトレチ中段テラス	底 18.0	4/4 完形	橙色	内面ヨコナデ
53	埴輪		基底部	Hトレチ墳頂部	底 17.4	7cm × 13cm	橙色	内面ヨコナデ、黒斑
54	埴輪		基底部	Hトレチ墳頂部	底 15.4	底部ほぼ完形	橙色	内面押さえ、ナデ
55	埴輪	笠形埴輪	基底部	Hトレチ墳頂部	底 12.6	8cm × 8.5cm	橙色	外側タテ板ナデ、内面押さえ、ナデ
56	埴輪	朝顔形埴輪	頭部	笠擺穴		頭部 1/3	橙色	外海タテ板ナデのちヨコナデ、内面ヨコナデ
57	埴輪	円筒埴輪	口縁部	不明	□ 24.0	□ 縁 1/5	橙色	内面ヨコナデ、万葉漢かし、赤彩
58	埴輪	射瓶形埴輪	肩部	不明	最大径 26.8	肩部 2/5	橙色	内面ヨコナデ、万葉漢かし
59	埴輪		体部	不明	最大径 25	15cm × 19cm	橙色	内面ヨコナデ、ヨコナデ、赤彩
60	埴輪	笠形埴輪	基底部	不明	底 18.0	底 1/4	橙色	外海タテのナデ、内面押さえ、ナデ
61	埴輪	円筒埴輪	口縁部	不明	□ 28.8	□ 縁 1/5	橙色	内外面ヨコナデ、赤彩
62	埴輪	朝顔形埴輪	口縁部	不明	□ 37.4	□ 縁 1/10	橙色	
63	埴輪	朝顔形埴輪	口縁部	不明		6.5cm × 11cm	橙色	内面ヨコナデ、赤彩
64	埴輪		基底部	不明	底 16.0	底 1/5	橙色	外海タテのナデ、内面押さえ、ヨコナデ

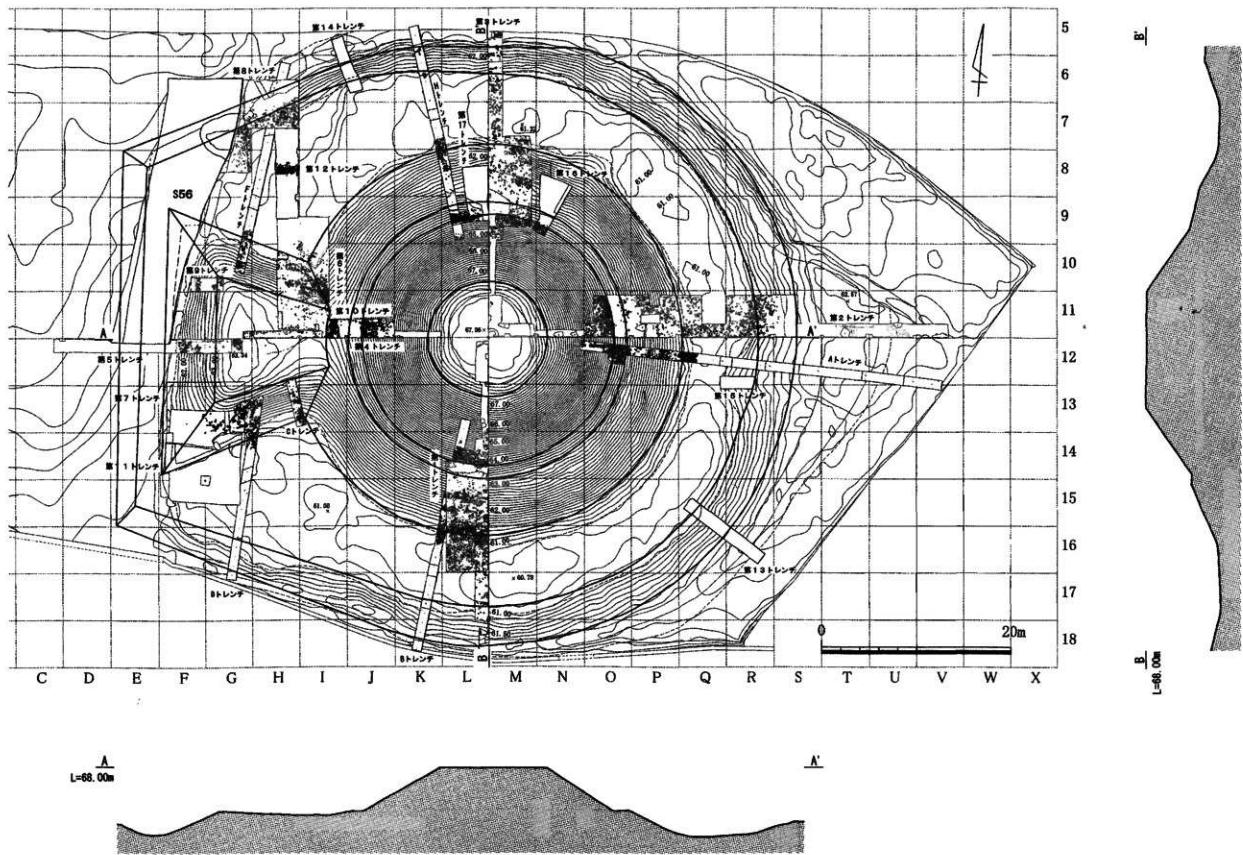
法量の単位は、cmである。

法量の「—」は、不明を表す。

法量の「底」は底部径、「□」は口径を示す。

残存率は、破片は割合で大きさで示す。

色調は、「標準土色帖」(農林水産省農林水産技術会議事務局監修)に掲げる。

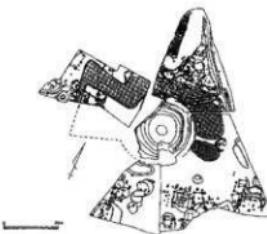


第19図 吉岡大塚古墳復元図

第4章 まとめ

1 第6次調査の成果

- 今回の補足調査により以下のことが明らかとなった。
- ① 東側周溝の外側には、外見上の高まりは認められるが、第13、14トレーニングの状況、また第2トレーニングの調査から、盛土は確認されず、周堤帶は無かったと判断される。
 - ② 周溝東側の突出部分であるが、周溝底を古墳築造の際に、掘り残していたと推定される。4世紀代の築造であるが、周溝内に土手状の施設をもつものとして、犬山市青塚古墳、甲府市銚子塚古墳がある。これらは、明確に渡り土手として地山を掘り残し、古墳築造の際の墳丘への通路と考えられている。また、和田岡古墳群の一つ行人塚古墳の古墳主軸線上の周溝内に、陸橋部が確認されている。陸橋部は、幅1.4~2mを測り、周溝下端より10~20cm高く掘り残している。この陸橋部は、周溝外部から後円部に接続している。吉岡大塚古墳で確認されたものは、現状、土手としての形状を留めていないが、築造時には通路としての施設があった可能性が考えられる。つまり、築造の最終段階に、掘り残していた土手を除去したが、痕跡として東壁の突出、周溝底の高まりとして残存したものと推定したい。
 - ③ 後円部北側の墳丘中段テラスは、後世に大きな搅乱を受けているものの、第16トレーニングで幅1.2~1.3mの平坦面を確認しており、後円部はこれまでの調査結果を総合して、幅約1.3mの平坦面(テラス)が、全周していたと考える。



第20図 行人塚古墳墳丘図

2 墳丘の復元

吉岡大塚古墳は、昭和54年の第1次調査に始まり、その後の古墳整備に向けての調査を含め、これまでに6次に及ぶ調査を行ってきた。墳丘の形状が良好であるため、古墳を構成する葺石、埴輪も良好に残存すると考えられてきた。ところが、その遺存状況は悪く、墳丘復元の情報が揃わなかったため、2度の補足調査を行った。これらの調査結果に基づき、吉岡大塚古墳の墳丘復元を行った(第19図)。復元による古墳の規模は、第3表の通りである。

	(単位 m)	調査前(第1次調査時)	復元(推定)
全長	55.0	54.6	
後円部直径	41.3	41.3	
墳頂直徑		12.5	
テラス幅		1.3	
後円部高	7.2	7.1~7.2	
前方部幅 墳頂		13.4	
前方部幅 墓	27.5	28.5	
前方部凸	2.5	2.4	
周溝幅	11.4	11.7(南)、11.8(東)、9.6(北)	
前方部周溝幅		4.8	

第3表 吉岡大塚古墳墳丘計測表

後円部の復元

後円部の中心点については、第1～3、10、16レンチの上段葺石の基底石の位置を基に、後円部中心を求める。これにより、上段墳丘内法の直径は約26.6mとなった。

後円部墳丘の裾については、これまでの調査の結果から、吉岡大塚古墳では墳丘裾に基底石が確認されていない。裾部は、墳丘斜面から緩やかな傾斜で周溝に移行しているように見えるが、傾斜の角度の変化点を認め、そこを墳丘裾とした。各レンチにおける後円部中心から裾までの距離は、第1レンチでは20.5m、第2レンチでは20.5m、第3レンチでは21mであり、その平均値から後円部直径は約41.3mと推定した。しかし、後円部北側（第3レンチ）では、復元円より外側に実際の墳丘裾とした位置がくる。墳丘裾の標高は、第1レンチで60.7m、第2レンチで60.9m、第3レンチで60.6mを測る。

次に墳頂については、古墳築造から長い年月が経過し、どの程度崩れているかは明確ではなかった。そこで墳頂部の最高所の標高67.96mを墳頂平坦面の高さとし、またこの標高と第1～3レンチ、第10レンチの上段葺石の傾斜角の交点を墳頂端とした。その結果、中心から墳頂端の距離は、第2、3レンチでは等距離であったが、第1レンチでは、18cm、第10レンチでは84cm短くなる。第10レンチで大きな差がでているのは、葺石傾斜角が他のレンチより緩やかであることによる。ここでは、第2、3レンチでの距離を採用し、墳頂直径は約12.5mと推定した。

上段墳丘の基底石の標高は、第1レンチは63.4～63.5m、第2レンチは63.5～63.6m、第3レンチは63.55m、第10レンチは63.45m、第16レンチは63.4m、第17レンチは63.5～63.6mであり、63.4～63.6m間で基底石を葺かれていたことがわかる。後円部北側では他のレンチと比較し、基底石の高低差がやや大きい。

墳丘中段テラスの幅は、第1レンチは1.3m、第2レンチは1.2～1.3m、第16レンチは1.2～1.3mを測り、これよりテラス幅は1.3mとした。2011年の報告では、第2レンチから原位置を保つ埴輪を検出したと述べているが、埴輪は墳丘裾に向かって傾いていることから、この埴輪は原位置を保っていないと考える。

葺石については、墳丘中段テラスから上には葺石が存在したことは、調査で確認されているが、墳頂部については調査では確認できなかった。しかし、崩落した多量の石の存在から墳頂まで葺かれていたと考えるのが自然である。墳丘下段については、墳丘裾に基底石が確認されていないことから、裾まで葺石は葺かれていなかったと考える。

また、葺石の工法を示す縦の区画石列を確認したのは、昭和54年度調査のAレンチと第2レンチの後円部東側である。Aレンチで上段墳丘の基底石から墳頂に向かって2.5m、第2レンチでは1.5mまで積まれていた。この縦の区画石の間隔は、約2.8mであった。第1、3レンチは、幅約4mのレンチを設定しているが、この範囲内で縦の区画石列は確認されていない。後円部東側で確認された縦方向の区画石は部分的なものか、石列の間隔は一定でないのか、明確でない。

前方部の復元

前方部の復元については、現況の前方部は北側が短く、左右対称となっていない。これが、築造当初からのものか不明である。今回は左右対称であったと想定し、復元を行った。

墳裾については、昭和54年度調査のDレンチと第11レンチの調査において検出した裾を直線で結び、復元した。復元した後円部径とこの前方部裾が交わる部分が、くびれ部の裾となる。前方部南側裾の標高は61.0m、くびれ部北側は第6レンチ内にあたり、標高60.95mを測る。

前方部の平坦面については、第4、5、6レンチの測量図及び土層断面図をもとに北側の平坦部端を復元し、それを南側に反転させた。

周溝の復元

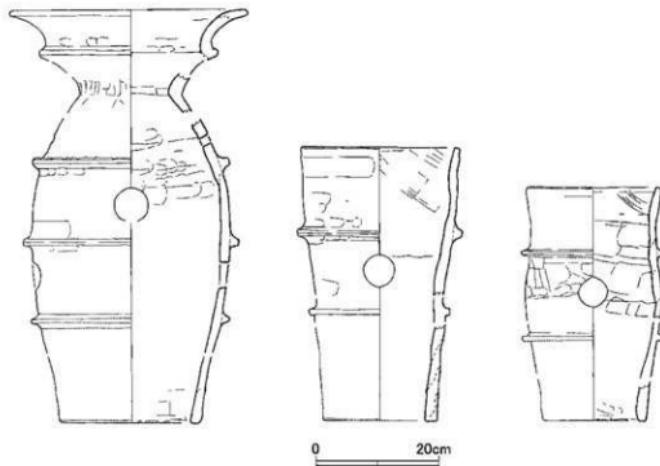
周溝の形状は、第8トレンチの調査により周溝外側の下端を確認し、墳丘に沿った形態ではなく、熱気球形をした盾型であることが確認された。

周溝の幅は、これまでの調査結果に基づき復元した。周溝の幅(墳丘裾から周溝外側上端)は、第1トレンチでは11.7m、第2トレンチでは11.8m、第3トレンチでは9.6mを測る。第1トレンチと第2トレンチは、周溝下端間が約7.5mと7.4mで、周溝幅同様に近似の値である。後円部中心から周溝外側上端の距離は、約32.4mである。しかし第3トレンチでは、下端間は約5.5mと狭く、外側下端から上端に向かう傾斜は、第1、2トレンチに比べ急斜になっている。後円部から前方部にかけては、前述した第8トレンチと今回調査した第14トレンチで検出した周溝外側の上端位置から復元し、その形状を未調査である南側に反転した。

前方部西側の周溝については、昭和56年度中原遺跡発掘調査で確認されている。報告書には前方部周溝の土層断面図が記載されている。この土層図をもとに前方部西側の周溝を復元し、幅4.8m、下端間の距離は2.8mと推定した。後円部周溝に比べ幅が、かなり狭いといえる。

3 墳輪の復元

これまでの調査により吉岡大塚古墳は、円筒埴輪、朝顔形埴輪、壺形埴輪が存在していたことがわかった。墳頂からは円筒埴輪、朝顔形埴輪、後円部の第1~3、16、17トレンチから円筒埴輪、朝顔形埴輪、後円部西側の第4、10トレンチから円筒埴輪、朝顔形埴輪、壺形埴輪、くびれ部の第8トレンチから円筒埴輪、壺形埴輪、そして土師器の甕が出土している。その出土点数は、円筒埴輪が圧倒的に多い。壺形埴輪は個体数も少なく、前方部に近い位置に樹立されていたようである。しかし、前述したように樹立した埴輪を確認されず、埴輪を設置した間隔も不明である。古墳を整備するにあたり、埴輪を樹立しての墳丘復元も考えられることから、埴輪の復元を試みた。



第21図 吉岡古墳埴輪復元図

埴輪の底径が明確なもの(今回使用した破片は、残存率が底径の1/8以上)は、16点であった。底径は15.5~23cmと大小の差が大きい。口径が明確なものは13点で、口径21.8~28.6cmで、これも大小の差は大きい。埴輪の法量については、ばらつきが相当存在したと考えられる。

朝顔形埴輪の復元は、口縁部、頸部、肩部、基底部の破片を整合的に組み合わせて、推定したものである。肩部の最大径が約35cmを測ることから、底径も大きいと考えた。また、円形の透かしが2段にもつことから、体部は3突帯4段構成と考えられる。推定される法量は、口径39cm、最大径は肩部で35cm、底径23cmであり、器高は69cmである。

円筒埴輪の復元は、口径にばらつきがあることから、大小の2種類を復元をした。出土した埴輪片から2突帯3段構成とした。大型のものは口径26cm、底径19cm、器高46cmで、突帯間に円形の透かしをもつ。小型のものは、口径22cm、底径17cm、器高39cmで突帯間に円形透かしをもつ。小型の円筒埴輪は、下段の突帯あたりで樽状に膨らむ形態である。

今回、資料が少ないため口縁部端部、突帯の断面形、底部の形状など細部の形態や技法の分析を行っていない。今後、他の東遠江の埴輪と比較する時には、属性分析を行おうと考えている。和田岡古墳群のような特異な形状と板ナデ、ナデの調整をもつ埴輪は、飯田市伊那谷の古墳出土の埴輪と類似している。伊那谷では、こういった埴輪を出土する古墳の築造時期は継続されており、各和金塚古墳、吉岡大塚古墳の2基をもって断続する様相とは異なる。

さて、このような地域性の強い埴輪をもつ和田岡の古墳群とは別に、和田岡から約4kmの逆川流域に位置する浅間神社3号墳や磐田原には堂山古墳など畿内に近い埴輪をもつ古墳が存在する。同じ遠江における両群の在り方は、埴輪の製作技術の違いやその情報の多寡だけによるのではなく、畿内政権との係わりも表出している可能性が大きい。今後、和田岡古墳群と磐田原の首長墓群との関係及び、畿内政権との係わりを明確にしていきたい。

参考文献

- 静岡県 1930 「静岡歴史」
掛川市教育委員会 1980 「吉岡大塚古墳 測量調査報告書」
掛川市教育委員会 1982 「中原遺跡発掘調査概報」
掛川市教育委員会 1990 「女高遺跡・行人塚古墳 発掘調査報告書」
磐田市教育委員会 1995 「遠江 堂山古墳」
掛川市 1997 「掛川市史 上巻」
浅羽町教育委員会 1999 「五ヶ山B2号墳」
袋井市教育委員会 1999 「石ノ形古墳」
静岡県教育委員会 2001 「静岡県の前方後円墳 総括編」
静岡県教育委員会 2001 「静岡県の前方後円墳 資料編」
掛川市教育委員会 2011 「史跡 和田岡古墳群 吉岡大塚古墳 第2次・3次・4次発掘調査報告書」
静岡大学人文学部考古学研究室 2011 「春林院古墳の研究」
同成舎 2011 「古墳時代の考古学3 墓構造と葬送祭祀」
掛川市教育委員会 2013 「史跡 和田岡古墳群 吉岡大塚古墳 第5次発掘調査報告書」
飯田市教育委員会 2013 「飯田古墳群 -論考編-」

吉岡大塚古墳小考

滝沢 誠

吉岡大塚古墳では、1979年に測量調査と部分的な発掘調査（第1次調査）がおこなわれたが、その後ながら本格的な調査の実施にはいたらなかった。このたび、史跡整備を目的として実施された第2～6次発掘調査（2007～2013年）のデータがすべて出揃うこととなり、吉岡大塚古墳の実態をより詳細に把握することができるようになった。ここでは、そうしたあらたな調査成果をふまえながら、吉岡大塚古墳の墳丘や埋葬施設をめぐって若干の考察を試みることにしたい。

1. 墳丘の復元

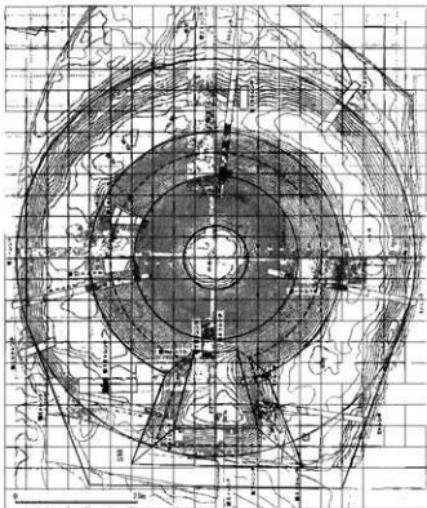
葺石の範囲 吉岡大塚古墳は、円丘部（後円部）に短い突出部（前方部）が結合した、帆立貝式古墳あるいは帆立貝形古墳と呼ばれる古墳である。以前の調査によても明らかのように、その円丘部は二段で構成され、下段墳丘の中位に一段のみの突出部が接続している。また、円丘部、突出部ともに墳丘斜面には葺石が施され、所々で裾部の基底石や縱方向の区画石が確認されている。こうした葺石の検出状況によれば、下段墳丘の葺石はその裾部にいたるまで全面に施されることではなく、中位レベル（標高62.1m付近）までにとどまるものであった可能性が考えられる。

じつは、下段墳丘の葺石基底石が設置された高さは、墳丘盛土の基底面の高さにはほぼ一致しており、それより上位側の葺石は盛土によって構築された墳丘の斜面に施されていたものとみられる。一方、それより下位側からも多量の礫が検出されているものの、本来もっとも残りがよいと思われる裾部に基底石は一切認められず、それらの礫は上部からの崩落によるものである可能性が高いと考えられる。すなわち、周溝外縁部の掘り込み面にも相当する旧表土面の高さより下位の斜面には葺石が施されていなかったと想定されるのである。こうした葺石の状況は、円丘部の第1トレンチや突出部の第5トレンチ及びDトレンチ（1979年調査）で検出された基底石と区画石の位置から推定することができる。

以上の理解によれば、葺石をともなわない下段墳丘の下半部は周溝の内縁部とみること也可能であり、視覚的には地表面上の葺石施工範囲が墳丘として強く意識されていたものと理解されよう。ただし、以下に述べるように、築造企画の点からみると葺石をともなない見かけ上の裾部も墳丘の重要な要素であったことがうかがえる。

築造企画 古墳の築造企画については、上田宏範の先駆的研究（上田1969）をはじめとする数多くの研究があり、帆立貝式古墳あるいは帆立貝形古墳については、石部正志の8等分値法（石部ほか1980）、沼澤豊の24等分値法（沼澤2006）にもとづく研究成果が提示されている。吉岡大塚古墳については、かつて櫛国男の設計論（櫛1975）にもとづく復元案が示されているが（掛川市教育委員会1980）、あらたな調査成果が得られたいま、その分析方法を含めた再吟味が必要であろう。もとより築造企画全般についての十分な検討をおこなう用意はないため、ここでは既往の方法の中でもっとも整合的な結果が得られた24等分値法によりながら、吉岡大塚古墳の築造企画を検討しておくことにしたい。

第22図は、円丘部の下段墳丘裾部（見かけ上の墳丘部）を基準外周線（径41.6m）とし、24等分値法にもとづく2単位区ごとの方格図を吉岡大塚古墳の測量図に重ね合わせたものである。これをみると、先に述べた下段墳丘の葺石施工範囲（破線）は、徑20単位（34.7m）の位置に整合している。また、各トレンチで葺石の基底石が良好に検出されている上段墳丘の裾部は、若干のずれをともないながらも、ほぼ徑16単位の位置にある。突出部については、前端がやや斜行するとみられるため単純ではないが、長く伸びる南側の裾部を基準にした突出部長は8単位であり、前端部幅はほぼ16単位である。全体として馬蹄形を呈する周溝については、左右の直線部に線形の違いが認められるものの、弧形部分（東半部）の外縁部上端は徑38単位と



第22図 吉岡大塚古墳の築造企画（1/800）

*破線は下段葺石下端を示す。なお、一部に報文中の復元案とは異なる部分がある。

掘削（=周溝の掘削）がおこなわれて見かけ上の裾部が整えられるとともに、その裾部に連続するかたちで下段墳丘の盛土施工が進められたものと考えられる。こうした築造企画の点からすると、下段墳丘の裾部が墳丘形態の一部として重要な意味をもつていたとの見方が可能であり、見かけ上の裾部を基準とした形態や規模の把握には一定の妥当性が認められよう。

2. 埋葬施設の問題

斜交埋葬施設 第3次調査では墳頂部の3方向にトレチを設けて、未発見の埋葬施設に関する確認調査がおこなわれた。しかし、埴輪片を含んだ表土層の直下では、中心部に近現代の掘り込みが確認されたのみで、埋葬施設に関する情報は一切得られなかった。そのため、翌年の第4次調査では地中レーダー探査が実施され、墳頂平坦面北西側の現地表下1.5m付近で埋葬施設とみられる強い反射が確認された。この反射は、長軸3m、短軸2mほどの略長方形で、墳丘主軸に斜交する方向性を示しており、墓壙をともなう木棺または粘土桶などの可能性が指摘されている（NPO法人いざと地中探査研究所2011）。

こうした探査結果の中でも注目されるのは、吉岡大塚古墳の埋葬施設が墳丘主軸に対して斜交する埋葬施設であるとみられる点である。福永伸哉がかつて指摘したように、墳丘主軸に斜交する埋葬施設は前方部が短小な前方後円墳や帆立貝形古墳に多く、両者の組み合わせは一つのパターンとして存在していた可能性がある（福永1990）。この点については、筆者も東日本の事例を取りあげて検討を進め、斜交埋葬施設は頭位原則を適用しながらも墳丘主軸への意識が低い前方部短小タイプを中心に採用され、それらは古墳時代開始期から古墳時代後期にいたるまで継続的に存在していたことを指摘したことがある（滝沢2012）。

吉岡大塚古墳の探査結果は、帆立貝形古墳における斜交埋葬施設の事例をあらたに追加する可能性があるとともに、和田岡古墳群では各和金塚古墳に次いで2例目となる斜交埋葬施設の存在をうかがわせる点で重

の整合性が高く、それが描く円弧は突出部の葺石施工範囲隅角に接している。

このように、下段墳丘の見かけ上の裾部を基準として検討すると、吉岡大塚古墳の築造企画は24等分値法との整合性が高いように思われる。一方、図示はしていないが、下段墳丘に葺石が施された範囲を基準外周線として検討すると、各部分の整合性はさほど認めることができない。また、他の等分値法では基本的に整数値を得ることができない。

以上の結果については、さらに細部の検証をするものの、少なくとも下段墳丘の葺石施工範囲と見かけ上の裾部が設計上密接な関係をもっていたことを示すものであろう。下段の葺石施工範囲が盛土範囲とほぼ一致していること、突出部の葺石施工範囲が周溝外縁部上端の基準線に内接しているなどを考え合わせると、吉岡大塚古墳の構築にあたっては、旧地表面を施工基準面とした墳丘と周溝の割り付けがおこなわれたのち、円丘部の斜面幅を2単位分拡張するかたちで地山の

要である。周知のように、各和金塚古墳は前方部が短いタイプの前方後円墳であり、吉岡大塚古墳に想定される斜交埋葬施設の存在は、古墳時代中期前葉から中葉にかけて築かれた2基の大型古墳が定型的な前方後円墳とは異なる墳丘形態や埋葬施設を採用していることの意味をあらためて問いかけるものとなろう。

周溝内の陸橋 斜交埋葬施設に関連して注目されるのは、周溝東側に認められる陸橋部である。現状でも墳丘東側の外縁部に明らかな張り出しが認められ、それにつづく周溝底は周囲よりも10~20cmほど高くなっている。この部分は墳丘主軸線よりもやや南側に位置し、第15トレンチの調査結果から、周溝外縁部と墳丘裾部を結ぶように地山が掘り残された部分であることが判明している。

こうした陸橋部は、古墳築造時の作業道とも考えられるが、墳丘側の進行方向は想定される斜交埋葬施設の長辺にはほぼ相対し、そのまま墳丘斜面を上がりれば北西側への偏在が想定される埋葬施設の南東側にひろく空いたスペースにたどり着くことができる。墳頂部にいたるこのような道の存在については、富山県谷内16号墳の調査事例から斜交埋葬施設との直交関係が指摘され、墓道としての儀礼的役割を想定する見方が示されている(宇野ほか1988)。吉岡大塚古墳における陸橋部の性格を考える際にも、検討を要する点であろう。

3. 和田岡古墳群と吉岡大塚古墳

墳墓要素の継承 和田岡古墳群を構成する5基の大型古墳の変遷については、まず古墳時代中期前葉に瓢塚古墳と各和金塚古墳が築かれ、その後、中期中葉から後葉にかけて春林院古墳や吉岡大塚古墳、行人塚古墳が築かれたとする見方が一般的であった(中嶋1990、半野1992など)。しかし、近年筆者らが取り組んだ出土遺物の再検討によれば、春林院古墳(前期後葉~末)→瓢塚古墳(前期末~中期初頭)→各和金塚古墳(中期前葉)→吉岡大塚古墳(中期中葉)という理解が妥当であり、行人塚古墳の年代についてはもっとも古く遡る可能性が考えられる(滝沢ほか2011)。このような検討の過程で、行人塚古墳をのぞく4基の古墳については、葺石をともなう二段築成の墳丘に共通性が認められるとともに、壺形埴輪から円筒埴輪に移行する墳墓祭祀の連続性と段階的变化が認められることを指摘したが、吉岡大塚古墳のあらたな調査成果は、こうした古墳間の関係を墳丘規模の点からも裏づける手がかりとなりうる可能性がある。

その要点のみを述べると、第一に、瓢塚古墳の後円部径(38m)と各和金塚古墳の後円部上段径(約40m)、吉岡大塚古墳の円丘部径(41.6m)は、きわめて近似した値を示していることが指摘できる。第二に、瓢塚古墳の前方部幅(25.2m)と各和金塚古墳の前方部幅(約24m)は近似していること、第三に、各和金塚古墳の上段墳丘長は、瓢塚古墳の墳丘長よりも3m程度短いことが指摘できる。

吉岡大塚古墳以外の2基については調査が不十分であるため、これらの計測値の信頼性にはやや問題がある。ただし、基本的部位の計測値には無視しがたい近似が認められ、これらの事実を積極的に解釈するならば、各和金塚古墳の上段墳丘は、瓢塚古墳の前方部長をやや縮小した規格とみることも可能である。また、吉岡大塚古墳を含めた3基の円丘部は、一定して直径40m規模を基本にしていたことが考えられる。

もちろんこうした規模の近似性は、より広汎な築造企画の基準にかかるものと想定され、地域独自の基準を示すものとは考えがたい。とはいっても、連続的に營まれたとみられる3基の大型古墳に部分的な築造企画の継承関係が想定されること、先に述べた諸要素の共通性や連続性とあわせて、和田岡の地に奥津城を営んだ地域首長たちの系列的関係をあらためて示すものとなろう。

吉岡大塚古墳の再評価 あらたな調査成果によれば、吉岡大塚古墳の墳丘規模は、墳丘長54.6m、円丘部(後円部)径41.6m、同高7.0~7.2m、突出部(前方部)長13.0m、同高2.4mである。また、先に示したように、24等分値法にもとづく吉岡大塚古墳の突出部長は8単位となる。これらの事実は、吉岡大塚古墳が從来からいわれる「帆立貝式前方後円墳」(佐佐1988)や「帆立貝形古墳」(石部ほか1980)に相当し、沼沢豊が厳密に定義した「小方部墳(=帆立貝古墳)」に該当するものであることを示している。

いわゆる帆立貝式古墳については、かつて地域の前方後円墳造営に対する規制を示すとの評価が与えられたが(小野山1970)、その後は、古墳時代中期に形成された大首長を頂点とする地域的な階層秩序に組み込まれた中小首長の墳墓とする見方が示されている(和田1998など)。また、帆立貝式古墳が集中する愛知県

志段味古墳群の被葬者像については、近年おこなわれた調査の成果をふまえ、馬に代表される渡来文化や交通ルート等を背景に力を伸ばした新興勢力（高橋2009）、あるいは当時の王権と結びつき最新の情報を入手していた首長層との評価が与えられている（瀬川2011）。

吉岡大塚古墳を含む和田岡古墳群の被葬者像については、古墳時代前期から継続的に大型古墳が営まれていてこと、在地的な色彩の濃い墳墓祭祀（壺形埴輪やナデ調整の円筒埴輪）を採用していることなどから、在來の伝統勢力とみるのが妥当であろう。この点の理解は志段味古墳群の場合と異なるが、各和金塚古墳に副葬されていた鉄製甲冑を含む豊富な武器・武具類は、同古墳の被葬者が当時の王権と密接な軍事的関係を築いていたことを物語っている。

和田岡古墳群が位置する中遠江では、太田川左岸域にあたる磐田市域に、松林山古墳（前方後円墳・117m）、高根山古墳（円墳・52m）、堂山古墳（前方後円墳・110m）といった古墳時代前期後葉から中期中葉にかけての有力古墳が相次いで営まれており、それらの古墳には近畿地方との濃密な関係を示す円筒埴輪や形象埴輪が採用されている（鈴木2008）。そうした中核的首長勢力との関係において、和田岡古墳群を営んだ首長層はより劣位の立場にあり、埴輪製作の面では基本的な技術情報を欠如したことになったとみられるが、先述のように副葬品の面では王権との密接な関係をうかがわせる証拠がある。

このように理解すると、和田岡古墳群に前方部が短小な前方後円墳や帆立貝式古墳が営まれた背景には、近隣の中核的首長勢力とは離れた周辺域にあって、在地の地域間関係では時として劣位の立場に甘んじながら、一方では王権との結びつきを強めつづった中小地域首長の二面性を読みとくことができるのではないだろうか。こうした観点をふまえつつ、一方的な規制論とも画一的な階層構造論とも異なる視角から、帆立貝式古墳としての吉岡大塚古墳を再評価していく必要があろう。

参考文献

- 石部正志・田中英夫・宮川涉・堀田啓一 1980「帆立貝形古墳の築造企画」「考古学研究」第27巻第2号 85-102頁
上田宏範 1969「前方後円墳」学生社
宇野隆夫ほか 1983「谷内16号墳」小矢都市教育委員会
NPO法人さといと地中探査研究所 2011「史跡和田岡古墳群 吉岡大塚古墳の地中レーダー探査」「史跡和田岡古墳群
吉岡大塚古墳第2次・3次・4次発掘調査報告書」掛川市教育委員会 64-67頁
小野山節 1970「五世紀における古墳の規制」「考古学研究」第16巻第3号 73-83頁
掛川市教育委員会 1980「吉岡大塚古墳測量調査報告書」
門 国男 1975「古墳の設計」築地書館
鈴木一有 2008「遠江における埴輪受容の特質」「古代文化」第60巻1号 77-86頁
瀬川貴文 2011「帆立貝式古墳について」「志段味古墳群【本文編】」名古屋市教育委員会 359-365頁
高橋克壽 2009「5世紀後半の倭王権と帆立貝式古墳」「花園大学考古学研究論叢II」花園大学考古学研究室30周年記念
論集刊行会 74-85頁
滝沢 淳 2012「東日本における古墳時代の斜交埋葬施設」「筑波大学先史学・考古学研究」第23号 1-20頁
滝沢 淳・平林大樹・西田真由子 2011「春林院古墳の研究—出土遺物の再整理—」静岡大学人文学部考古学研究室
中嶋郁夫 1990「東海2 東部(静岡)」「古墳時代の研究II 地域の古墳II 東日本」雄山閣出版 28-39頁
沼澤 豊 2006「前方後円墳と帆立貝古墳」雄山閣出版
平野和男 1992「遠江」「前方後円墳集成 中部編」山川出版社 87-93頁
福永伸哉 1990「主軸斜交立体部考」「鳥居前古墳-総括編-」大阪大学文学部考古学研究室 103-120頁
遊佐和敏 1988「帆立貝式古墳」同成社
和田晴吾 1998「古墳時代は国家段階か」「古代史の論点4 権力と国家と戦争」小学館 141-166頁

図 版



第13、15 トレンチ 調査前（南から）



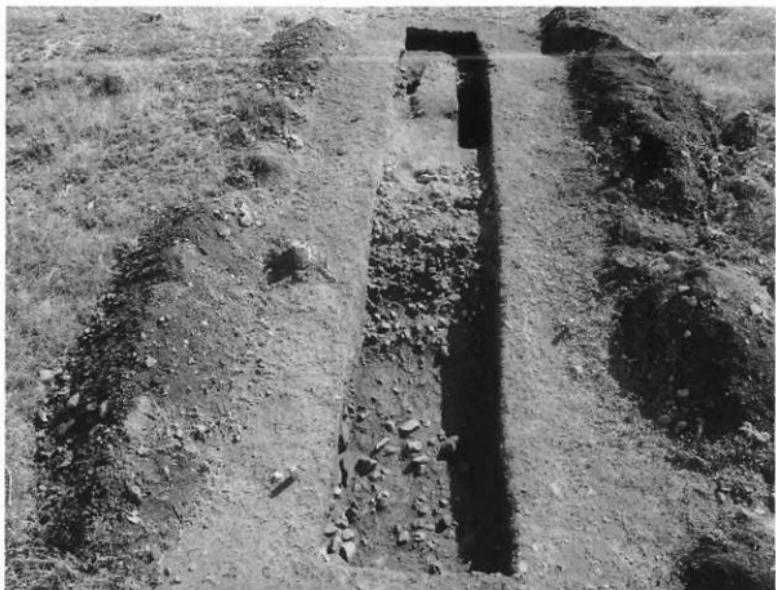
第14 トレンチ 調査前（南西から）



第 16、17 トレンチ 調査前（北から）



第 13 トレンチ 完掘（南西から）



第13 トレンチ 完掘（北西から）



第14 トレンチ 北壁土層

PL.4



第 14 トレンチ 完掘（南から）



第 15 トレンチ 完掘（西から）



第16 トレンチ 上段葺石確認状況（北から）



第16 トレンチ 葺石確認状況（北から）



第 16 トレンチ上段葺石 完掘（北から）



第 16 トレンチ 完掘（北から）



第17 トレンチ 上段葺石確認状況（南東から）



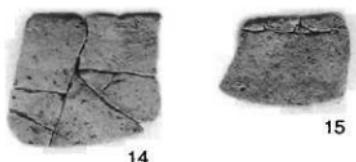
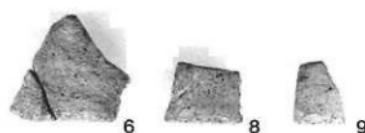
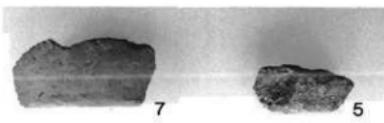
第17 トレンチ（北から）



第17 トレンチ 上段葺石完掘（北から）



第17 トレンチ 完掘（北から）





37



47



38



48



49



39



57



58

報告書抄録

史跡和田岡古墳群
吉岡大塚古墳
第6次発掘調査報告書

2015年3月31日

編集・発行 挂川市教育委員会
静岡県掛川市長谷一丁目1番地の1
電話 0537(21)1158
(株)幸栄グラフィック
印 刷 静岡県掛川市弥生町21
電話 0537(24)4341
